

陳 述 書

2018年 8月 15日

氏名 齋藤博子

事実経過

一 私と夫

1

私は1941年4月25日に生まれた後、私の母タツイが斉藤清信と再婚したのに伴い、斉藤の籍にはいり、福井県鯖江市東鯖江に住んでいた。1957年に福井県鯖江市の中学校を卒業すると、4月から東洋レーヨンに勤務し、近くにあった工場で仕事することとなった。

1958年12月、友人に誘われて訪れたダンスホールで知り合った金本正二と結婚し、結婚後は鯖江市鳥羽中の夫の家に入り、夫の親兄弟と同居した。

2

金本正二は1936（昭和11）年8月19日、父金ケンソク、母李ヨンチョンの次男として韓国で生れた。父金ケンソクは鯖江でめがねの枝の部分と鼻のせの部分セルロイドの板を打ち抜いて製作する仕事をしていた。私と結婚したころ、金ケンソクとともに、すでに朝鮮総聯の運動にも参加していた。当時、総聯の活動拠点が鯖江市神明町にあったようで、そこで開かれる集会に参加していた。

二 北朝鮮への帰国

1、総聯の説得

1961年はじめから私の家に総聯の人がたびたび来るようになった。総聯の福井県の幹部らしい新井（漢字不詳）という人が来て、北朝鮮に帰国することを熱心に勧めた。その人の説明では、朝鮮ではアパートに入れるから、みんなは何にも持たないで朝鮮に帰ればよい。病院・学校・アパート代など、何にもお金を使わないで済むという。毎日のように、新井という人物が来て、北朝鮮ではみんな仕事に就いている、お父さんの場合も心配ない。それに日本からは何も持って行かなくても、みんなアパートにあるから安心して行けばよいと、繰り返して説得していた。夫正二のように体が弱い人は、病院に行ってもお金がかからないし、本当にいい国だと説明した。これまで

繰り返し説得されてきた正二とその父は、もう朝鮮に行くことに、はっきり決めているようであった。毎日のように「朝鮮、朝鮮」と話がでていた。だんだんと他の家族もその気になり、そんなに朝鮮がいいのだったら、みんな一緒に行こうと、正二の兄も言い出した。

そんなある日、新井はアパートの写真が載った雑誌を持ってきて、私に見せた。私はその雑誌を見ながら「本当にこんないいアパートで生活できるのかな」と思った。その時、新井は「どうです。嫁さんも入って見ないか」と私に勧めた。私は笑ってごまかしながら、新井に聞いた。「日本から帰った人はみんな、こんなにいいアパートに住むことができますか。」「ああ～。もちろん帰った人は、みんなこんなアパートに住み、なに不自由なく生活ができるようになっています。アパートは家族によって部屋が2つか3つと変わりますが、みんな2つ以上の部屋はあたるようになっている。それに台所は瓶がいくつかあり、その瓶の中には米がいっぱい入っている。なんの心配もなく暮らせるようになっているそうです。仕事のほうもすぐに会社は決まるし、なんの心配もない。ただ人が行くだけだという。どうですか。行ってみませんか。」当時、総聯がさかんに宣伝した「地上の樂園」という説明そのものであった。

家では毎日、毎日朝鮮の話でいっぱいだった。また新井さんが来た。「どうですか。決心しましたか、朝鮮に行ったら日本の奥さんたちは3年したら帰ることができる。」といった。「本当にまた帰ることができるのですか。」「そう、3年なんかすぐにきますよ。いいじゃないですか。」新井は、また「いい暮らしでしょう。アパート暮らしなんて、ここにいると絶対にできないですよ。だったら朝鮮に帰った方がいいですよ。正二さんも体が弱い、病院に行ってもただだし、本当にいいですよ。お父さんがお酒を飲んで、日本でのようにお母さんや家の人をたたいたり、物を壊したりしたら、朝鮮ではまわりの人が黙ってはいない。だからお酒を飲んでも心配しないでいいのです。」

「3年したらまた戻ることもできるという。それならば行っても良いのではないか。」という気持ちが私の中にも大きくなっていった。新井がいうには「3年という月日はすぐにくるから大丈夫だ。朝鮮に行けばなんの心配もないし、日本みたいになんでもあるから、日本以上に幸せに生活ができるから、朝鮮に行ったほうがいい。」とのことだ。それに朝鮮に行けば、日本みたいに朝鮮人と言われることがないし、仕事も探す必要がないとの事だ。

2、帰国の決断

朝鮮の話がでて3ヶ月が過ぎた。その日は、総聯の人たちが3人ほどやってきた。どうしても返事が聞きたいとの事だった。私も姉も顔を見合わせた。また3人は説得し始めた。「朝鮮はよい国だ。日本の奥さんたちは3年したら、また日本にくることができるから心配しないで、夫について行きなさい。今の生活よりは本当に楽だから、一緒について行きなさい。今日は返事を聞きに来ました。お父さん、お母さん、どうしますか。」義父は「はい、行きます。」と答えた。義母は「み

んなが行くのであれば、私もついて行きます。」と返事した。正男と正二は「はい。私たちも行きます。」という。「それでは、兄さんの奥さんと正二さん奥さんどうですか」と尋ねてきた。姉は「はい。行きます。」と答えた。そして「正二さんの奥さんは？」と言うので、迷いのあった私も頷いた。

こうして、話は朝鮮に行くことに決まった。1961年の2月のことだった。新井は「よく決心をした」と、とても嬉しそうにしていた。

3、家を売り朝鮮学校へ

5月にはいつから正二さんの家を売ることになった、その家を売ってから、家族は朝鮮学校で暮らすことになった。家の家具はみんな人にやったり、売ったりした。メガネの機械は朝鮮に持っていくことにした。財産をすべて処分し、出発までの1月は朝鮮学校で暮らした。

朝鮮に帰る日が近づいてきたある日、正二の妹が大阪から帰ってきた。妹も皆と一緒に朝鮮に帰るといって、夫と別れてきたという。それで正二の兄弟は全員帰ることになった。

4、実家で過ごした日

1961年6月12日に鯖江を出発することになったので、私は6月10日に実家に帰り、兄弟と家の親戚と一緒に写真をとった。その日は実家に泊まり、妹たちと一緒に源氏ほたるを捕りに出かけた。その日ことは私にとって忘れる事が出来ない日となっている。あくる日、実家の家族に別れを告げ、朝鮮学校に戻った。

5、新潟へ、そして朝鮮へ

1961年6月12日、私と夫正二、娘弥生、そして義父、義母、夫の妹2人、夫の兄、その妻山内秀子（日本人妻）とその娘1人、全員で10人という大家族で昼過ぎの汽車に乗り、新潟に向かった。新潟駅でバスに乗り換え、日赤センターに着いた。新潟駅にはたくさんの迎えの人が来ていた。朝鮮の旗を振りながら大きな声で歌を歌っていた。バスの中でも朝鮮の歌、キムイルソンの歌を楽しそうに歌っていた。

6月16日、新潟港を出航し、船の中で2泊した。船の底の部屋で、ほとんど揺れることもなかった。窓の外には魚が行ったり来たりするのがよく見えた。お昼になって、私が娘弥生を連れて部屋の外に出てみると、そこにはソ連の兵隊が鉄砲を持って立っていた。

船内放送でもうすぐ朝鮮につくから降りる準備をするように伝えられた。

三 清津で知る総聯のウソ

1、清津到着

清津に着いたあのときのことを私は一生忘れる事が出来ない。いよいよ船は港に着いた。港ではたくさんの人たちが出迎えに来ていた。誰かが、金日成元帥マンセーと声を上げた。それに釣られて何人かが万歳をしていた。そうした喜ぶ人の一方で叫び声か何かわからないうめき声が聞かれた。その時誰かが、「これは・・・話が違うな」とデッキの手すりをぎゅっとつかんだ。そのまましばらくの間立っていた。岸には荷揚げを待つ貨物も沖仲仕も見当たらなかった。港に近づくに連れ、出迎えの人たちの様子ははっきりと見えてきた。その人たちの身なりは、帰国者たちから見ていかにも貧しそうで、ひどく痩せていた。みんなの顔はとても黒く、それも日に焼けて黒くなっているのではなく。汚れて黒くなっているのだ。迎えにきている子供たちは、上半身だけ服をきていたが、下はパンツもはかない状態で、そんなことが目に入ってきた私は「総聯から説明されていた様子とは違う」という強い印象を受けた。そんな様子がもう少し早く分かっていたら、苦労しそうなこの国に帰ってくる人はいなかったと思った。

私一家も降りる準備をした。その時スピーカーで放送が流れてきた。「腕章を付けていない人には手荷物を渡さないで下さい」といっているのを聞いた私は、荷物を盗られる危険があるのだと知った。

2、入口にはカギ

第63次帰国船には1125人の帰国者が乗り込んでいた。案内にしたがってデッキから降りると、帰国者たちはみんな大きな体育館のような建物に入れられた。

帰国者が収容された広い大きな建物の出入り口には鍵がかけられ、外へ出てみることもできなくされた。何人もの人がドアを開けてみようとしていたが、開けることはできなかった。ドアに鍵がかかっていることはすぐにみんなに伝わった。港の様子から不安を感じていた人たちを一層不安にさせた。もう日本に戻ることは出来ない。私だけじゃない。ほとんどの帰国者がそう思ったようであった。もちろん夫正二もそう思った。私はこのとき「日本にいる朝鮮の人たちは、騙されて帰ってきたのだ」と思った。

3、配られたお菓子

中に入って何時間が過ぎたのかわからなかった。あっちこっちでは小さな子供たちが、お腹がすいたと大声を出して泣いている。私はその時、あーもうお昼が過ぎたのだと思い時計を見たら3時が過ぎていた。私たちもお腹が空いてきた。それから1時間立っただろうかたくさんの人たちが中に入ってきた。前の方で何かを渡しているようだった。皆貰った瞬間は皆黙っていたが、すぐに「こんなものでお腹が膨れるのか」と怒鳴る人がいた。「今すぐ日本に返してくれ」と大声を出している。私たちの手にも何か渡してくれた。それはご飯じゃなくてお菓子だった。そのお菓子もとても食べられそうもなかった。私が娘弥生を見ると、弥生は何にも知らず、無邪気に手に持った。

私はその時、「あーやっぱ来ない方が良かったのか」と思った。でも、それはもう遅かった。

4、咸興への移動

午後9時頃になって、これから咸興（ハムン）へ移動すると指示があった。また荷物をまとめ、みんな集まった。バスに乗ってしばらく行って、汽車に乗り換えた。汽車は一般の人は乗っていないかった。

5、汽車の南京虫

汽車の中には木の椅子があったが、本当に殺風景だった。だんだん暗くなり、やがて外は全然見えなくなっていった。座っていると、なんだかもしもそと変な感じがしてきた。弥生も、あっちもこっちもかゆいと泣き出した。立って見たが、目には何も見えない。弥生を見ると虫に刺されたようにふくれていた。

何かいるのではと、あっちこっち探した。その時、南京虫が1匹出てきた。正体はこの虫だった。あっちでもこっちでも、「あー、虫がたくいる」と大騒ぎになってきた。もうかゆくてたまらない。薄暗い汽車の中でみんなが騒ぎだした。

汽車はとても大きな駅についた。私たちは待っていたバスに乗り込んだ。しばらくすると、バスは咸興（ハムン）に到着した。大勢の人たちが迎えに来てくれた。私たちは案内されるままにその人たちについていった。

6、咸興で

それからしばらくしてから1軒、1軒案内されながら部屋に入っていった。そこはがらんとした殺風景な部屋だった。朝食をとってしばらくすると、みんな集まるように言われ、ぞろぞろと大きな部屋に皆集まってきた。それからしばらくして‘えらい’人が来て朝鮮の事をいろいろ説明した。ここは咸興と言って、朝鮮では2番目に大きな市であること、ここにはビナロン工場があるといった。その会社ができ上がると、朝鮮にいる人たちは本当に幸福に暮らせるようになると話した。私はそれを聞くと、本当にそうなればよいなど希望をもたせるものであった。

朝鮮について2日目に、朝鮮のお金を一人当たり20ウオンずつくれた。私の家族は60ウオンをもらった。その20ウオンの価値がどの程度なのか私には分らなかった。7日間ほど咸興にいた後、8日間目になってまた出発することに決まった。

7、咸興の店

私の家族は恵山に行くことに決まった。恵山に出発する前日、咸興の町に出てみる事ができた。町を歩いていると、どの店にも小さな箱に入った綺麗な品物が並べて飾ってあった。一軒の

店に入って並べてある小さな箱とビンを見ていると、一人の女の人が出てきた。その人に聞くと、小さな箱はマッチで、ビンはシロップだという。マッチとシロップしかない店が何軒もあった。こんな大きな町で、この二品しか品物がないことに私たちは当惑し、咸興の町でさえ人びとがどんな暮らしをしているのか不安になる品不足を目の当たりにした。

四 定住の地、恵山の困難な生活

1、恵山へ

翌日、私たちがまたバスに乗りこむと、間もなく駅についた。すぐに待っていた汽車に乗り込んだ。恵山へ行く人たちは私の家族の他に3家族か4家族いた。汽車は前回乗った汽車よりもっと汚かった。

汽車はゆっくりゆっくりと動いていた。いつになったら着くのか、不安と待ち遠しい気持ちでいっぱいだった。汽車の中で一晩を過ごした。お昼近くになってきた時、次の駅でみんな降りるという知らせがあった。汽車は駅にゆっくりとゆっくりと入っていった。咸鏡北道と両江道の境にあるこの駅の名前はギリチューだった。

帰国者たちはぞろぞろと汽車から降りた。福井県からきた人たちも私たち以外に2家族いた。1軒の旅館に入り、今日はここに泊まるということだった。食堂で食事をとり、みんな別々の部屋に入っていた。

私も夫正二も、これからどんなところに行くのか想像もできず、不安でいっぱいだった。その日は不安になりながらも、どうにか眠りについた。明るる日、9時ごろ汽車に乗る事になった。6時間も汽車に乗り、中国と朝鮮が川を挟んで向かい合っている町へ行くのだという。朝鮮のほうから中国が見えると聞いた。

汽車の中で過ごす6時間は本当に長い時間だった。いよいよ駅に着き、みんな疲れ切って何の話もせずに係りの人について行くばかりだった。外にはバスが待っていた。それから旅館までまたバスに乗って行くという。

バスは10分ぐらいで、すぐに止まった。1961年6月30日頃、私たちは恵山という町に到着した。

ぞろぞろバスから降りて旅館に入っていた。なんだか暗くてきたない感じの旅館だった。私たちが入居するアパートがまだ完成していないようで、1か月ほどその旅館で過ごすことになった。

2、恵山の旅館の食堂

夕方になって食堂に行くことになった。食堂で夕食を待っていると、子供たちが騒ぎ出した。なんだろうと思っているとご飯が出てきた。初めはパンが手出てきたが、なんだか黒かった。それ

からは何が出てきたのかわからない。まずパンを一口食べてみると、なんだかすっぱくて食べられなかった。

次の日もまたパンが出てきた。毎日、朝はパンだった。なんだか食べるのが嫌になった。娘の弥生は食べ物がどれも嫌だといって、毎日ぐずっていた。おやつはないし、本当に困ってしまった。

3、私たちに割りあてられた家

いよいよ自分たちの家に入れることになった。またバスに乗り、30分ほど走ったところにあるアパートだ。バスから降りると、たくさんのアパートが並んでいた。私たちに割り当てられたのは3番目のアパートの4階だった。道を歩いていると、地元の人たちが立ち止まってじろじろと帰国者たちを見ていた。

アパートの4階に上がっていった。上がって左側には正二と私たちの家、右側は母たちの家になっていた。それぞれ家の中には部屋が2つと台所あった。

ドアをあけて見ると、昼だというのに中は薄暗かった。入ったところに廊下があった。その廊下は真っ暗だった。部屋は8畳くらいの広さで、高い天井に裸の電球が付いているだけの何にもない殺風景な部屋だった。トイレは場所だけあったが、便器もなく、物置に使うしかなかった。用便は1階まで下りて、共同トイレを使うか、子どもたちには夜だけでもオマルを使うしかなかった。台所も裸電球が一つぶらさがっているだけで、流しには水道のパイプの穴があいているだけで、排水設備も何もなかった。それに物置は小さく、その中にすこしの薪が入っていた。

4、日本から持ち帰ったウイスキー

アパートのもうひとつの部屋を開けると、船に積んで持ち帰った自分たちの荷物が先に到着して置いてあった。夫はその荷物を見るとすぐに布団の荷物をほどこだした。布団をほどこいて何をすると聞くと、「お前のお父さんからもらったウイスキーが入っているのを思い出した」という。

夫たちはそのお酒をどんなに美味しく飲んだことであろう。日本のことを思い出しながら、私はまるで見てはいけない物を見たかのように目をそらした。夫は泣いているようであった。口にはださないが、北朝鮮の生活の実態を知った今、夫も本当にくやしかったのであろうと私は察した。

5、最初の食事

台所のかまどには釜がかかっていた。釜は鉄の釜だった。薪は木の根っこを割ったものだった。何日か使えるようにしてあった。その横に壺が3つ置いてあった。私がおの壺の一つを空けてみると、中には何も入ってなかった。二つ目をあけたが、何もない。三つ目をあけると、何か入っているみたいだった。手を入れてみつと、粉が入っていた。私はまだ何かないかなと思い、探して

みた。かまどのすみになにかが置いてあった。中をあけてみると、米が入っていた。

私はその時思い出した。日本にいるとき、アパートに入ったら、瓶のなかに米がいっぱい入っていると聞いたことがある。それなのに、この米は1Kgぐらいしかない。いままで私たちが日本で聞いてきた事は、みんな嘘だったのじゃないのか。私はがっかりしてしまい、これから先、どうやって食べていけばいいのか分からなかった。

しかし、朝鮮にきて私が家族だけで寝るのははじめてであったし、それまでの1ヶ月以上もの間、食事らしい食事をしたこともなかった。米は1キログラムぐらいあったが、私はそれが何日分であるか分からず、その1キログラムぐらいある米を一度に炊いてしまった。米なんか何日も食べていなかったようなものだったので、みんながしっかり食べたいと思っていると考えたからである。

明日からは米も無いし、小麦粉でどうやって食べていけばいいのか分からなかった。小麦粉は日本のメリケン粉とはまったく違った。はるかに粗悪なもので、水でといても粘りがなく、黒くてまずいものだった。それからどうにか過ごしたある日のこと、朝鮮の人が米を売りにきた。何でもいから米と換えてくれというのだ。私が物々交換で米を手に入れた初めての経験だった。

6、配給の不足を物々交換で補う生活

帰国した当時、配給は小麦粉が90%、米は10%であった。私の家族は15日分で15Kgくらいだ。その中の米は1.5Kgだ。1年後には小麦粉ではなく、トウモロコシに代わった。毎年秋になると、9月から10月のころの一月ほどは、ジャガイモが配給された。米の配給は少なく、夫の弁当だけに使うとしても足りなかった。私はこれでどうやって食べていったらいいのか分からなかった。私は、配給の粉は粗悪でどうにもならないから、粉2Kgと米1Kgを交換して、夫の弁当の米を確保しようとした。それでも足りなかったなら、日本から持ち帰った服などと交換して、夫に食べられる米を切らさなかった。子供たちがみんなトウモロコシを食べていても、夫にだけは米のご飯を食べさせるようにしていたが、子供たちは何にも文句を言わなかった。

長男が生まれた後、私たち4人の配給は、夫が700g、子供がそれぞれ300g、私が300g。合計一日1kg600g。15日分で24Kgである。その内容は、季節や作柄などの影響なのか一定していなかった。トウモロコシが70~90%で、米は10~30%、したがって、15日分の米は3~7Kgぐらいしかない。これも規定通り配給をもらえた場合のことで、いろんな名目で天引きされることもあり、どうしても追加して米を買わなければならなかった。

私のアパートの近くにも店はあったが、普段は味噌と醤油などがあるだけで、そのほかに品物は何もないような状態だった。時々魚を売るときがあったが、そんな時は大変な数の人たちごった返し、なかなか買えなかった。私たちは、まだ慣れていないので、上手く買い物ができず、現地の人たちが米とか豆を持ってくると、日本から持ち帰った服などの品物と交換した。

米の配給はわずかしかないので、日本で生活していた帰国者たちが最低限の食生活を維持するためには、物々交換で米を手に入れなければならなかった。交換する品物がなくなると、配給のトウモロコシと米を2：1の割合で交換して米を手に入れるしかなかった。

7、弁当

夫正二たちは仕事に行かなければならない。いちばん心配なのは弁当だった。米は5キログラムぐらい手に入れたが、そればかり食べるわけにはいかなかった。弁当にご飯を半分入れ、半分はパンを入れた。パンといっても、これまで作ったこともない私が手元にある材料と器具でつくるため、パンなのか石ころなのかわからないような代物だった。

8、魚を買う

ある朝のことだ。隣にいる私の姉が、「今日は店の横の広場で魚を売るといっていたから、行ってみよう」と誘ってきた。私たちが帰国してから初めてのことだった。広場には、もう早くからたくさんの人が集まっていた。その場所には帰国者も何人か来ていた。「すこしでも買えたらいいね」と話ながら、待っていた。私の前にたくさんの方がいるから、買えそうもなかったが、どうしても一匹でも買えたら、家族がどんなに喜ぶだろうと思った。販売が始まると、もう大変だ。「もう何匹もないよ」と叫ぶ声が聞こえた。私は一生懸命に「ください」と叫んだ。なんども叫んだけれども、なかなか届かなかった。その時、私の手に魚が触れた。私はその魚をしっかりと握って離さなかった。すぐに、その日の魚は売り切れた。朝鮮にきて生活を始めてから初めての魚だった。

7、深刻なもの不足の生活

日が経つにつれて一層生活は苦しくなっていた。日本から持ってきた品物は、最初の1年間ですべて売ってしまい、米と交換する品物は何もなくなった。子供たちは大きくなっていくし、着る物もないし、買おうと思ったら高くて、なかなか買えない。

子供を育てるにもおしめさえもない、紙もない。だから子供は下半身を裸でいた。家ではオンドルだから、おしっこをしたり、大便をしたりすると雑巾で拭いて、雑巾はまた洗って使うのだ。本当に日本では、考えも出来ない事ばかりだった。

8、減らされた配給

15日間分くれていたその配給も、1965年からは、13日分しかくれなくなった。そのため13日分の配給で15日間食べなければならなくなった。15日分くれていても足りないのに、さらに減ってしまったため、みんな苦勞した。15日分の配給でも一週間も食べるとなくなってしまうので、あとの一週間分をなんとかしなくてはならないので、みんな苦勞していた。卵一個食べ

るのも難しい生活だった。

9、川から水を汲む生活

一日の一番はじめの仕事は水汲みからはじまる。水はアパートの後ろの川にいて汲んできて、4階まで運び上げる。それも朝早く行かないとだめなのだ。時間がおそくなると川ではみんなが洗濯をするから、飲み水として使えなくなるのだ。

川にでてみると、川のそばにはたくさん人がいた。川で顔をあらっていた。洗ってからは、また水を汲んで帰るらしい。その顔を洗う人を通り抜けて、人がいないところに行って水を汲んで帰る。

家の中で洗い物などに使った水は、流しの排水ができるようになっていなかったのだから、また4階からもって下まで降りなければならなかった。

10、風呂のない生活

朝鮮の家にはお風呂がなかった。みんなどうやって体を洗っているのかわからなかった。私は初めのうちは毎日のように体を拭いていたが、しだいに何日も体を洗わなくても平気になるしかなかった。生活のすべてが、日本にいたときの生活から昔の生活に戻ったようなことになった。

11、亜麻糸づくりの割当て

そんな毎日が2ヵ月ほどすぎたある日、班長が来て、アパートの下に亜麻をもってきたので、それをきれいに糸にして出してください、といった。私は何も分からず下に下りていって見た。となりにいる姑も下りて見に来ていた。「これをどうするのですか。」「この草をたたいて糸にするのだそうだ。」一軒の家がどれだけの亜麻をたたくのか決まっているそうだ。

アパートの玄関一つに24軒の家があった。その24軒の家にいる女たちには家でする仕事が割り当てられた。亜麻という稲のような草が配分され、それを叩いてアマの糸を作る仕事をしなくてはならない。私は亜麻を見るのも初めてだし、亜麻から糸を作る仕事をするのも初めてであったので、本当に大変であった。1軒の家で何キログラムと決まっておき、それが出来ないと反省させられて、どうして出来なかったのか言い訳しなければならない。そんな事が何日も続いた。当時私は妊娠しており、とてもつらい仕事であった。お腹もだんだん大きくなり、本当につらかったが、コレは出来ない、アレも出来ないとはいえなかった。幸い一部は姑が手伝ってくれた。やっと仕事を済ませて横になると、体中がちくちくと刺すような感触に襲われる。亜麻のカスが服にたくさんついていてからだ。それを払い落とし、洗い落とすために川へ行って洗わなければならなかった。

12、キムチ漬け

旧の盆がすむと、急に寒くなって来る。朝晩が寒い。9月の終わりころからキムチを漬けはじめ、薪も割らないといけない。

薪といえば、木の根っこを会社から運んでくる。それも乾いてしまうと、ほんとうに割りにくい。トラック1台分で冬を過ごさなければならない。毎日、朝早く薪を割る人がたくさん見かけた。

それが終われば、キムチ漬けに取り掛かる。会社から白菜が300Kg配送してきた。次の日から白菜を塩漬けする作業を始める。会社からはにんにくと唐辛子も一軒一軒に分けてくれる。夜はにんにくの皮をむく。それから唐辛子を粉にする。それで調味料を造っておく。塩漬けがすむと、川に白菜を運んで洗う。洗うのもたいへんだ。朝鮮の人は頭に載せて運ぶが、私にはそれができないので、バケツに入れて運ぶ。洗うだけで何日もかかった。漬けたキムチは壺に入れて、穴の中に入れておく。穴のなかに入れておかないと、凍ってしまうからである。凍ったら壺も割れてしまう。キムチは1年間のおかずで、キムチを漬ける仕事は1年間で一番大切な仕事である。キムチがなければ、何にもおかずがないことになる。

13 薪割り

私の家の薪は木の根っこで、とても割りにくかった。しかし割らなくてはならない。夫が帰ってくるまでは、待つてはられなかった。夫は夜遅くに帰るし、体が弱いので、私は力仕事をさせたくなかった。それに夜遅くに薪を割ると、朝鮮の人たちはとても怒った。何かが出るとかなんとか言って、とても嫌がったので、遅くならないうちに、私は一生懸命に薪を割った。

秋の始まりのころはまだ暖かいので、薪はそんなには使わない。1回薪割りをすると、3、4日は間に合った。わった薪を抱っこするようにして、何回も運ばなければならないので、大きな袋に入れて運ぶようにした。袋に入れて3回ほど運んだ。あとは後かたづけの掃除をするだけだ。割った薪のくずがたく出るが、それも袋に入れて持って帰った。そんな日が今日も、明日も、あさってもつづく……。

14、川向こうの世界

私は今住んでいる村からまだ一度も出た事はなかったが、夫は仕事でバスに乗ることもあった。バスに乗って川の横を通るときは、夫がバスの中にいる人に「川の向こうはどこですか」と聞くと、「まだ知らないのか。川の向こうは中国だ」と教えられ、夫はびっくりしたという。いつも夜遅く歩いて変える時、川の向こうを見ると、ネオンがキラキラと光っているから、「あれはどこだろう」と思っていたらしい。川の向こうの賑わいと明るさに比べ、こちらの朝鮮の方はというと、夜は真っ暗だった。中国は、いつ見ても青々としている畑がいっぱい広がっているのが目に入っ

てくる。それに比べて朝鮮の畑は、いつ見ても何にもしていないようにしか見えなかった。こんなにもよその国とは違うのかと思わされた。

15、夫の仕事

恵山に来て5ヶ月くらいしたとき、夫は日用品の会社を辞めて、恵山のメガネの会社に行くことになった。会社といっても中には何にもない仕事場だけだった。それでも正二は一から始めようと一生懸命だった。夫はメガネの会社に行くようになってから、それまで以上に一生懸命に勤めた。

日本からメガネの腕を作る機械を一台持って来ていた。会社の社員は20人位いたが、まだメガネを作る準備もできてはいなかった。夫は毎日何かを捜し歩いているようで、家に帰ると本当に疲れはてていて、米のご飯も食べられない状態だった。夫は日本にいる時から体がわるいので、私は何かを売ってでも夫にだけは白い米のごはんをかかさないようにしていた。

16、引っ越し

それから何ヶ月か続いたある日、会社から帰ってきた夫は会社から家を引っ越すように指示があったという。会社が新しい家を指定し、私たちは家を変えることになった。1962年5月半ば頃のことだった。その日もとても暖かかった。みんなが手伝ってくれた。荷物は手押し車2台で運んでくれた。それまではアパートの4階で水も出ない部屋だったが、今度は水道があった。私たちの家は3軒長屋で、家の中に入ると、なんだか暗くてじめじめしていて、気持ち悪かった。

部屋は6畳位で、台所は部屋よりは少し広いが、私はなんだか嫌な気持ちをした。隣の家の人は中国から来た人のようだった。まだ言葉がわからないから、私は本当に泣きたい気持ちだった。娘の弥生が外に出て遊んでいるところを見ると、本当にかわいそうで、弥生が泣いて家に入ってくると私はどうしていいかわからなかった。でも娘はすぐに泣き止み、笑顔になって遊んでいた。私はそんな時こそ「あーなんで日本を離れたのかな」と後悔した。

17、夫の暴力

それから何ヶ月かが過ぎたある日の夜、夫が仕事から帰ってくると、酒に酔っているようだった。何かのきっかけで夫婦喧嘩になった。これまで朝鮮に来てから喧嘩なんかした事がなかった。日本から持ってきたギターで夫は私の頭を叩いた。その瞬間、ギターは大きな音を立て穴が開いてしまった。私はしばらくの間呆然となっていた。穴が開いたギターを見て、夫はなお更腹が立ったのか、また殴りだした。子供たちが泣き出した。私も子供たちと一緒に泣きたかったが、隣近所に聞こえることを心配し、子供たちをなだめた。

夫はそのギターをととても大事にしていた。とても大きくてカッコいいギターだった。夫はギ

ターが壊れてからも、なお更私にあたるし、子供たちにまであたった。私は本当に悲しくなって、ここにはけんかが長引くだけだからと思い、子供を連れてバス乗り場に行った。最終のバスに乗り、姑の所に行くことにした。姑の家に着き、夫を一人家に残してきたことを知ると、姑はすぐに帰れと大きな声で怒鳴った。その声を聞いて子供達は泣き出した。朝鮮に来て身寄りも何にもない私は、姑の所に行けば優しい言葉一つでも掛けてくれるだろうと思っていたのだが、本当に悲しいよりも寂しかった。来なければ良かったと思い、すぐにでも子供達を連れて姑の家を出たい気持ちだったが、子供たちが寝ているのを見て我慢した。ともかくその日は仕方なく子供たちと一緒に姑の家で寝た。朝早く目を覚まし、7時ごろに朝ごはんを食べ、8時ごろバスに乗り、9時ごろには家に帰り着いた。

家は真っ暗で、中に入ると夫が寝ていた。部屋は足の踏み場がないくらい散らかっていた。私は何も言わずに片付け始めた。部屋の隅にギターが投げられていた。あんなに大事にしていたのに、このぼろぼろになったギターを見ると、夫も本当に寂しいのだろうと思った。その時、夫が起きてきて、「今から会社に行ってくる。ご飯はいらぬ。」と言って、すぐに出かけていった。その日から、夫は何事もなかったかのように何も言わなかった。私もそのことには触れなかった。

18、夫の脱出願望

帰国後2、3年が経過した1963年か1964年のころだった。私の夫は突然「先に日本へ戻って、後からお前たちをつれに来る」と言い出した。軽々しくこんなことを言う夫ではなかったので、よくよく思いつめた結果の発言だと私は思ったが、どのような計画で、どんな方法で日本に戻るのか、そこまで考えた夫の気持ちがどのようなものであったか、聞くことはできなかった。しかし、夫が北朝鮮に来たことを後悔していること、日本にもう一度戻りたいと考えていることは明らかだった。総聯の組織の一員として、上部組織を信頼し、北朝鮮政府の説明を疑わなかった結果、帰国という誤った選択をしたことに、私以上に深い後悔と家族への罪の意識をもっていた。

19、公開処刑を見せられる

ある日、味噌と醤油を買いに行き帰る途中に、私は一枚の張り紙を見た。その張り紙は今度の日曜日に恵山の飛行場で公開処刑があるから、みんな見に行くようにと書いてあった。子どもは18歳からです、と書いてあった。その次の日に班長が来て、今度の日曜日に死刑があるから参加するよと言われた。私は子どもが居るから行けないと言うと、子どもたちはまとめて見る人が居るから心配しないで参加するよと言われた。

その日、夫が帰ってきた時に今日こういうことがあったというと、夫は「行ってはだめだ。子どももいるのに、あんな処刑場にどうして行けるのだ！」ととても怒っていた。それで、私は行かないことに決めたが、町全体が死刑を見に行かなければならなかった。

1966年か1967年の秋だった。当日の朝、11時から5人が死刑になるらしいとみんなに噂が広がった。その日になって班長が「みんな用意をしたか？」と家々を回って歩いた。私の家にも来た。

「班長、私は行けません。子どもも小さいし、うちの主人も行くので、私は行けないのです。」
というと、「みんな主人も行くのだ。あなたの主人だけではないよ。」

「でも主人が小さい子どももいるのにどうして行くのか、と怒るのです。」

「子どもは班で見るとなっているから心配しないで行きましょう。」と班長は言った。

私の班は14号まであったが、1軒の家に2世帯入っている家があるので、20人くらいいた。知らない人もいたし、知っている人もいた。

「さ～行きましょう。みんな離れないようにね。みんな固まってね。たくさんの人たちが来るからはぐれないように」と、班長は何回も念を押した。

山を上がり始めたら、もうたくさんの人たちが上がって行く所だった。私たちもみんなはぐれないように、みんな1列になって上がって行った。道は細い山道であった。みんな何を言いながら歩いているのかわからなかったが、みんなの顔色は良くなかった。

みんなが行く所に足を運んだ。その時、私の横にいるおばさんが、「弥生のオンマ、あそこを見て」と言った。わたしは指を指すほうを見た。わたしは本当にびっくりしてしまった。柱を十字架にしたものが5本も立てられていた。

わたしたちは前へ前へと進んでいった。だんだんと人々が集まって、これから始まる事を待っている。その時スピーカーが大きく鳴り響き、今から始まることを知らせてくれた。その声を聞き、人々は尚ざわめき始めた。5人が処刑されることとなっている。

その時、1台のトラックが入ってきた。その中には死刑囚が乗っている。広場の真ん中には3つの机が並べられその横には処刑台があった。車の中から5人の死刑囚が出てきた。警察官が何か読んでいたようだった。呼び上げるたびに1人ずつ出てきて5つある死刑台の下に並んだ。それから警察官が出てきて目隠しをし、柱に縛った。先に足を縛り、それから腰を縛り、最後に胸の周りを縛った。それが済んでから1人ひとりの死刑囚の前、50mぐらい離れて1人に3人の警察官がついた。1人の警察官が3発ずつ撃つようになっており、またスピーカーから始まる事が知らされた。

すぐに鉄砲の音がした。私はまともに見ることが出来なかった。しばらくして見てみると、頭が垂れていた。胸のところから血が出ていた。5人の死刑囚はあつと言う間もなく死んでいった。

すぐにまた警察官が出てきて死刑囚の下に穴を掘って埋めるようだ。スピーカーが「この人たちのような悪いことはしないように」と大きな声で叫んでいた。

こんな殺され方をするほどのこととは何なのか、私にはわからなかった。

五 泥棒と闇商売で生き延びる生活

1、夫の病気

1982年か1983年のある朝のことだった。7時になっても夫が起きてこないで、子どもたちに、父を起こしてきなさいと言った。父を起こしにいった子供が「お母さん、お父さんが起きられないようなの」というので、私は急いで夫の所へ行った。夫は本当に疲れた顔だった。

「お父さんどうしたの？」と側に寄って見てみると、そばに真っ赤になった手ぬぐいが落ちていた。

私はびっくりした。すぐに夫の胸を水で冷やした。

こんなことは何年か前にもあったので、すぐに水で冷やすといい、と聞いていた。何の薬もない朝鮮では、病気になればどうすることもできない。でも病院には行かなくてはならない。病院に行くと診断書をもらわなくてはいけないのだ。薬もない病院に行っても、何の役にも立たないが、配給をもらうためには行って診断書をもらわなければならない。

すこし良くなって夫は会社に行ってみたが、会社の人たちが一目見ても体調が良くないことが分かる状態だった。夫はつばを吐くと血が混じっていた。そんな状態であったので、私は夫を無理やり家に連れて帰った。それからというもの、夫はずっと寝たきりだった。

朝鮮では6ヶ月休むと「サイボジャン」という診断をもらうことができる。夫は「サイボジャン」の診断をもらって仕事を免除されるが、その代わりに私が仕事に行かなくてはならない；そうしないと、配給がもらえなくなってしまうのだ。

こうして私は会社に勤めるようになった。眼鏡の仕事は日本にいるときに少しやったことがあるので、どうにかすることができた。

2、鉄道建設工事に従事

それから何ヶ月か経ったある日、会社の班長が私を呼んで、明日から鉄道の道造りをやってくれないか、と言いだした。それは会社のきまりで、新人は3ヶ月間必ず行かなくてはならないのだった。私は「行きます」と返事した。

その仕事は、山を削って汽車の線路を新しく作る仕事だった。職場が私の家から少し遠いので、朝早く家を出なくてはいけない。他の会社からもたくさんの人が来ていた。朝鮮では、何か新しい物を造る時、どの会社も1人か2人を派遣しなくてははいけないのだ。

3、夫正二の死

夫には何の薬もなく、ただ寝ているだけだった。夫と喧嘩した時を思い出すと、死んだほうがましだと思う時も何度かあった。でも目の前で寝ていると、ほんとうにかわいそうだった。すき

な物も食べさせられないし、なんにもしれやれないことを思うと、私はいてもたってもいられなかった。その日はいつもの日よりもとても苦しそうだった。

子供たちみんなを呼び、これから病院に連れて行こうと相談した。近所の人が車を見つけにいてくれた。病院に行くには、遠いので車でないと行けないのだ。だんだん日も暮れて、あたりも見えないようになってきた。夫を毛布に包んでから、また毛布の上に乗せて、両端をみんなでつかんで通りまで運び、車が来るのを待った。しかし、待てど暮らせど車は通らなかった。そこで車をまわっていると、夫は外で死んでしまうかもしれないので、家に連れて帰ることにした。家の中では電気が薄暗く部屋の中を照らしていた。夫はずかしく寝ていた。その時だった。夫の喉から痰が引っかけたような声が聞こえてきた。私はびっくりして子供たちを呼んだ。みんな父のまわりに座って見守った。私はその時はじめて涙があふれ出た。「お父さん、私をおいて先にいくの。私はどうしたらいいの。たくさんの子供たちを私一人でどうすればいいの。」私はこれから先のことを思うと、なみだが止まらなかった。1993年4月4日のことだった。日本で暮らしていたなら、結核で死亡することなど、ほとんどない時代であるのに、満足な治療も受けられず、夫は死んでいった。

山に行って夫を埋めた。その時、子供たちは弥生夫婦、長男夫婦、次女とその二人の子供、三女夫婦、次男と四女はまだ結婚はしていなかった。

4、鶏泥棒をした娘たち

1992年のこと、まだ夫がいたころだった。私は恵山の家を売り、金策というところに行った。金策には三女の夫婦が住んでいた。そこは魚も安いし、何かと便利なので、私と夫と二人だけで行くことにした。そこには夫の妹もいる。それに三女たちもいるから、すこしは子供たちが商売をして楽だと思ったからだった。

それから1年ほど後、私が恵山まで配給をとりに行って戻ってきたときのことだった。私が恵山からもらってきた配給はトウモロコシの粒のまんまだった。それを機械で米みたいに粒にしなくては食べられない。三女と四女が機械のある家に行って、トウモロコシを挽いて米のようにしてくる、その時のことだった。

その家には鶏がたくさんいた。三女が「琴美。あの鶏を捕まえて家にかえりなさい。」といった。琴美は恐ろしくて嫌だといった。周りにはトウモロコシを持ってきた人もいなかった。その時、三女が鶏を1匹つかんで、琴美の服のなかに押し込んだ。琴美はびっくりしているひまもなしに、「早く外にでて帰りなさい」といわれた。琴美が自分の腹の下を見ると、鶏の羽がでていたので、あわてて押し込んで外に出た。すぐに機械が止まって、周りは静かになった。三女はすぐに琴美に「早くいけ」と目で合図をしていた。琴美はあわてて家のほうに向かって走ってきたそう。三女もすぐに帰って来た。すぐにお湯を沸かし、毛をむしらなければならなかった。お湯が沸いた。

とりにお湯をかけながら毛をむしり始めた。こんなことをしたこともない三女なのに、どんなにかお肉が食べたかったのだろう。みんなむしり終わると、今度ははらわたを出さなくてはならなかった。でもそれだけはお姉ちゃんにもできなかった。

三女は鶏の頭を切って、沸いているお湯の中に入れた。しばらくしてもう炊けたのか、三女はそれを鍋から取り出して、塩をつけて食べ始めた。琴美はびっくりして、「お姉ちゃん、なにを食べているの」といっても、無我夢中で食べていた。それを食べ終わると、三女は黙って座っていた。いつもの三女とはまったく違った三女だった。

5、さらに悪化した食糧事情－1994年以降

食糧事情がもっと酷くなったのは1994年からだった。どこに行っても人が死んでいる、あそこにも、ここにもと、毎日毎日その話ばかりだった。私たちがいつ死体になるか分からない。私も生きるために、どんな商売をしてでも稼がなければならなかった。1993年には正二さんが亡くなった後は、私は娘の家に行ったり息子の家に行ったりしながら、商売をした。市場に出て巻き寿司を作って売ったり、食べられる野草、タンポポ、つくし、はこべ、ヨモギなどをとってきては売ったり、ほんとうに苦勞をした。私だけじゃなく、朝鮮の人はほとんどみんながこんな商売をしていた。お金が沢山ある人は、中国の品物を買って、それを少し高く売る。家には紙一枚ない、鼻を咬むこともできなかった。

1997年頃からは、朝鮮では本当にみんながこじきみみたいな生活だった。毎日毎日食べる物もない毎日だった。市場に行っても倒れた人もいれば、座って動けない人もいる。

これまでは、期日より遅れても少しは配給がもらえたが、97年頃からまったくくれなくなった。だから会社に勤めている人は機械を壊し、その中の銅線をむいてそれを売った。だから会社では機械が壊れて、動かない機械となり、仕事が出来なくなっているところが大部分だ。その銅線は中国に売るので。その銅線の商売をしていて、多くの人が警察に捕まっていた。

それからだんだん変な噂が広がってきた。恵山の何処どこで、人間の肉を売っているとか、人間の肉を食堂で使っているとか、そういう噂が広がった。私は、人間の肉の脂は炊くと三角になって浮くと聞いた。

6、アカ（銅線）の闇商売

1994年か1995年ころ、私は恵山と金策を行ったり来たりしながら商売をしていた。夫は体が悪いから、何もできなくて家にいた。知人が金策でも有名な大きな会社において、アカ（銅線）やアルミニウムを集めて安く売ってくれるから、私はそれを恵山に持って行って、すこし高く売った。生きていこうと思ったら、そんな事でもしなければ食べていけない社会状況であった。汽車に乗っても警察官がたくさん乗っているので、見つからないようにアカをどうやって運ぶかが

重要な問題だった。どうにかして少しでもたくのアカを運ぶ必要があった。私は昔戦争に行く人がしたみたいにゲートルのように作ったものにアカを隠して足首に巻いた。足だけじゃなくて、腰にもいろんな所に隠して、上に大きな服をきて汽車に乗った。ビニールの袋の中にはりんごをいれて、そのあいだにまたアカを入れて、それを汽車の窓にかけておく。それをすこし離れたところから見張っている。汽車の中は人がいっぱいいて、歩くのもやつのところを、警察官が行ったり来たりする。

7、赤ん坊のお腹に隠した銅線

1996年か1997年のある日のことだった。この日も私は汽車に乗っていた。私の横に小さな赤ん坊を負った若い女がいた。私は汽車の中の人たちにあんまり押さないで、赤ちゃんが死んでしまうよと言いながら、私はその赤ちゃんを守ってやった。私の目的地まで行くには、普通に行くとは6時間かかるのだが、停電にでもなれば何時間かかるか分からない。座ることもできないし、身動きもできないくらい人が混んでいる。その赤ちゃんはとてもおとなしく、私が汽車に乗ってもう3時間以上にもなるのに、おとなしく眠ったままだった。周りの人はほんとうにおとなしい子だねと、みんなが褒めていた。その時、1人の警察官が「どけどけ」といいながら無理やり私の横を通り過ぎようとした時、「なんだ、これは」と私の背中をたたいた。私はドキッとした。警察官はすぐに「俺についてこい」といい、また私の前にいる赤ちゃんを負った若い女にも「お前もついてこい」とどなった。私は何にも言えないで、そのあとをついていくことにした。その女もなんにもいわずについてきた。汽車の中に警察官が入る部屋がある。そこにはたくさんの人がいた。男の人、女の人、若い人、年取った人、いろんな人がたくさん捕まっていた。その中に入った人は服をぬいでアカ（銅）をみんな出してしまうしかない。それからどこから来たのか聞かれ、すぐ次の駅でおろされてしまう。私が恵山から来たというと、「警察に連れて行く」と言われ、その中に留め置かれた。その若い女も一緒に警察に連れて行くといい残すと、その警察官はまた出て行き、外から鍵をかけた。私は警察にいったら大変なことになるのではないかととても心配だった。その若い女がおぶっている赤ちゃんは、まだ眠っているのか、あれから何時間も過ぎたのに、起きなかった。私はなんだか心配になってきた。でも、恐ろしくて赤ちゃんを見ることが出来なかった。

汽車は恵山についた。警察官がきて鍵を開け、中に入ってきた。「さ、おりるんだ」というので、私と若い女は一緒におりた。改札を通り抜け、私たちは警察に向かった。小さな部屋に入って待つと、肩に星を3つ付けた警察官が入ってきた。私は足ががたがた震え始めた。その上級の警察官は椅子にすわりなさいといった。私はしばらくの間は座ることもできずに立っていると、また二人に座りなさいといった。私は座った。どこに住んでいるのかと聞くので、恵山だと答えた。夫はどこに勤めていたのかと聞き、私は「恵山メガネ工場で仕事をしていました。」と答えた。名前はと聞くので、「金正二といいます。」と答えると、「それでは帰国者だね」といった。私は「はい」

と答えた。「ではあなたは日本人か」ときくので、「はい。わたしは日本人です」といったとたんに、「もういいです。」私は簡単にすんでしまった。

つぎに若い女に聞いていた。その人も恵山からきたと聞いていた。その警察官は「子供をおろして、お乳でも飲ませなさい」といった。でも若い女はおろそうとはしなかった。なんでおろさないのかなと心の中で思っている時に、警察官がそばによって行って子供をのぞいて見た。つれてきた警察官はあまりにも赤ちゃんが泣かないので不思議に思ったのだろう。「アズモニ（おばさん）。赤ちゃんをおろしなさい。」ちょっと大きな声でいった。女の人はびっくりしておろしはじめた。机の上に赤ちゃんをおろし寝かせた。それでも赤ちゃんは動かなかった。私もそばにいて、赤ちゃんを見たら、もう顔が青白くなっていた。警察官は女の人に聞いている。その女の方はだまっていた。警察官が赤ちゃんの服を開いてみると、赤ちゃんは死んでいた。警察官はまた聞いた。それでも女はだまっていたので、警察官はまたどなった。もうだめだと思ったのか、女の方は服を脱がせ始めた。その時はじめて女の方は泣き始めた。私は「あー、やっぱり死んだのだな」と思った。警察官が「あー」と大きな声を上げて後ずさりした。私ももう一人の警察官も何事かと思った。警察官が「これを見てください」といった。上級の警察官は立ってそばに行き見てびっくりしていた。ただ死んだ赤ちゃんではなかった。

赤ちゃんの服は真っ赤に染みんでいた。警察官が、これはどういうことかと訊いたが、子供に手は付けなかった。すぐに服を脱がしなさいと急ぎ立て、女が服を脱がせると、赤ちゃんのお腹が見えた。そのお腹には穴が開いていた。開いたお腹の中は真っ黒で、何かが入っているようだった。

そのとき警察官が子供のそばに近寄って行った。私は警察官の顔をずっと見ていた。その瞬間、警察官の顔色が変わった。私も子供の方を見た。赤ちゃんのお腹の中には赤の電気線が入っていた。警察官は次々とお腹の中から電気線を取り出していった。

人間としてこんなことが出来るのか、自分が生きるためとはいえ、あんまりじゃないか、私はその女にこう怒鳴り付けたい気持ちをぐっと押さえた。

小さな赤ちゃんのお腹に、どんなにたく入っても1Kg程度ではないか。赤ちゃんのお腹に電気線を入れるとき、どんな気持ちだっただろう。こんなことだから汽車の中で何時間経っても泣かなかったのだ。

私がそう思っているときに警察官が、もうあなたは帰ってもいいとだったので、私はすぐ外に出た。その後、その女がどうなったのか分からない。私は腰に巻いていたアカを取られただけで済んだ。警察官もまだ他に隠していたことを知っていたようだったが、その人も人間だから、全部奪ってしまうと私が食べるのに困るだろうと考えて手加減したように思えた。

手に持ったリンゴの袋の中にもアカは少し入っていた。私は急いで家に向った。家では子供たちが待っていた。全部は取られなかったので元は取り戻し、中国に売る人に頼んでタバコを持ってきてもらい、それで少しは儲けがあった。しかしそれ以後、私はアカの商売を止めた。

8、中国に豚を売り、たばこを受け取る

またある日のことだった。私の次女光恵が来てどこかで豚を売っていないかと訊くので、私が驚いて豚を買ってどうするのかと聞き返すと、中国に売るといふ。あちこち歩き回って探した結果、ある農家が60Kg程度の豚を売るといふので、その日のうちにその豚を買った。

豚肉は、夜の8時から9時の間に中国に持っていくことになった。その日は寒く、川には氷が張っていて、荷物を運ぶにはとても都合がよかった。荷物は光恵と婿が二人で箱に入れて縄をかけて引っ張っていった。川を警備する軍隊と組んでいるから大丈夫だといふが、心配なので、私も子供たちに付いていった。

約束した場所に着いてしばらくすると、中国の方から何かピカッと光り合図があった。すると婿が大きな箱をずるずると引っ張り始め、光恵と一緒に凍った川の上を滑って行った。30分ぐらい経ただろうか。2人は何かたくさん箱を持って戻って来た。何度も行ったり来たりしていた光恵が、私に早くこの箱をリヤカーに乗せて先に帰ってくれと頼んだ。私は何が入っているのか分からないまま、急いでリヤカーを引っ張って家に戻った。

警察に捕まるのではないかと、ずっと心配しながら、急いで歩いた。無事に家に着いたが、今度はこれをどこに隠すかが問題だった。そのとき三女が、キムチを貯蔵する蔵穴の中に入れてたらかんと耳打ちしてくれたので、私も、そこに入れておけば何とかなるだろうと思ひ、蔵穴の中に隠した。

それからまもなくして、光恵がリヤカーで荷物を運んで来た。まだたくさん残っているから、また行かねばならないといふので、私も付いていったが、今度は長男も一緒に来てくれた。

「昌日、あれは何なの。」

「お母さん、あれはタバコ。今はタバコが一番早く売れるんだよ。光恵が豚と交換したんだ。」

「それでいくら儲かるのかい。」

「2倍以上は儲かると思うよ。」

でも危ない仕事なので心配だった。私たちはいろんなことをしてきたが、あんまり長く同じことをすると怪しまれるので、2、3回で止めて、すぐ違う商売をするようにしていた。

タバコを運ぶのに汽車に乗っていくときもある。汽車の中はいつも満員なので、背中に大きなリュックサックを背負い、両手に荷物を持っては、なかなか汽車の中に入れない。それで仕方なく汽車の天井に乗ることになる。

汽車の天井に乗るといふのはとても危ない。汽車が走っているときはうつ伏せになって、恐怖に怯えながらじっと耐えている。まかり間違えば電気に感電する恐れもある。たぐの人が、こういう危険なことをしなくては食べていけなかった。

うつ伏せになっている時も、いろんなことを考える。何時間もの間うつ伏せになっていると、

いつの間にか眠ってしまうこともあった。気がつくと、もうすぐ目的地だった。目的地に近づくとつれて、今度はまた他のことを心配しなければならない。汽車から降りた後、改札口には警察官が立っているの、そこを通過するのが難しいのだ。

私はある男の人のすぐ後ろにくっついて無事に通り抜けることができた。

こんなことをして生活しなければならない月日が何年か過ぎていった。

9、米泥棒となった私

またある日のことだった。家主が私の部屋に入って来て、今日の夜8時ごろ一緒に出かけようというのだった。どこへ行くのかと訊くと、ともかくはさみとリュックサックを用意するようと言われた。私は何のことだか分らなかったが、とにかく準備して待った。

8時少し前に、家主が行きましょうと声をかけてくれた。私は慌ててリュックサックを持って、玄関を出た。外に出てみると、4、5人の人がいたが、その中には私の長男もいた。私はどこに行くのかと長男に聞いて見たが、長男も知らなかった。暗闇の中を歩き始めました。両側は山でその間に道があるだけだった。1時間30分ぐらい歩いて山の間を通り抜けると、両側には田んぼが広がっていた。

稲刈りが終わった田んぼに、ところどころ稲が残っていた。誰かがその田んぼの中に入っていった。どうして田んぼに入っていくのか分らなくて、黙って道にそのまま立っていると、長男が、早くついて来るようにと小さな声で呼んだ。

男たちはだんだんと奥に入っていった。私は何も知らずに後をついて行った。しばらく行くと、たくさんの稲が立ててあった。そのとき家主が、早くしないと見つかるよと声をかけた。私と長男は何をするのか全く分らなくて、黙って座っていた。

すると横にいた男の人が、稲の実がついているところをはさみで切り取って、袋に入れるのだと教えてくれた。私はびっくりした。あ、それではさみを用意させたのだと、改めて思いました。

私と長男が顔を見合わせていたら、早くしなさいと、また急き立てるので、私もこうなった以上はもう後には下がれないと思い、はさみを動かして稲穂をリュックサックに入るだけ一生懸命押し込んだ。息子も一生懸命入れていた。

どのぐらい経ただろうか。私は入れている間に欲が出て、もっと大きな袋を持ってくるのだったと後悔をしていた。そのとき家主が、みんないっぱいになったかと声を掛けた。みんなはもういいよ、帰ろうと答えた。私も入るだけ入れてもうこれ以上は入らなかったの、急いで田んぼからで出た。道に出るまで本当にどきどき心配した。

男の人たちも何も言わないで、ただ急ぐだけだった。私はこの稲を持って帰って、どうやってお米にするのかも分からなかった。どうするか心配しながらただ急ぐばかりだった。道には誰一人歩いていなかった。

ずしんずしんと大きな音が聞こえてきた。私は音が聞こえてくる隣の部屋に行ってみた。借家の主が昨日の稲を搗いていた。私は「あ、こうするんだ」と初めて知った。朝鮮では何でも粉を作るときには、鉄で出来たジョルグという道具を使う。そこに稲を入れて鉄の棒でくくんと搗くのだ。しばらく搗くと籾殻が取れて米粒が出てくる。それを何度か繰り返しているうちに、真っ白なお米に変わってきた。

私は米を量って見た。一つのリュックに入っていた米は7Kgぐらいになった。これは間違いなく泥棒だった。生れて初めてした泥棒だった。泥棒になって生きるしかない国に来たことが無念でならなかった。

10、寿司を作って売る

私はこのお米を元に商売をしてみようと考えた。それはお寿司を作って売ることだった。早速光恵と一緒に、市場に海苔や巻きずしの中に入れるものを買に行った。

市場にはたくさんの人がいた。すしを売る人もたくさんいた。一本いくらで売っているか見てみると10円だった。「よし、はじめてみるか。」私はすぐに作ることにしました。

次の日、朝早くから作り始めた。10時ごろにやっと作り終わって、私と光恵二人で市場へ行くと、もうすでにたくさんの方が集まっていた。

勇気を出して「お寿司、買ってください」と声を出した。何べんも大きな声で叫んだ。だんだんと人が集まってきた、一人二人と買って、おいしいおいしいと言ってくれた。30本ほど作っていったが、3時ごろには2本残るだけとなった。私は「今日はこの辺で帰ろう」と娘に言って、明日の用意をして家に帰った。

お寿司も初めのうちは結構売れていたが、だんだん売る人が増えてきたので、思ったほどうまく売れなかった。その日もまた作って行った。しばらく売っていると、食べ物を売っている人たちがみんなこっちに向かって必死になって走ってきた。

「ねえ、みんなどうしたの」

「逃げなさい。警察が来て、取っていってしまうよ。早くにげなさい。」

彼女たちはそう言いながら、そのまま走っていった。私も逃げて隅に寿司を隠し、しばらく様子を見た。その日はまだ20本ほどしか売れていなかったが、もう売る気もなくなって、明日一日分の食糧を買って家に帰った。

11、往復1時間の水くみ

水も思うままに使える毎日だった。1992年か1993年のころ、私が恵山の息子の家にいたとき、必要な水を確保するのはたいへんな重労働だった。

「光恵、お母と一緒に水汲みに行こう。私、となりに行って水リュックを借りてくるよ。す

ぐ来るからね」

水は家から歩いて30分ほど離れた山の下にあった。バケツ2つとリュック1つで2回ぐらい運ぶと3日間は使えた。山を登ってくるのが一番大変だ。だからこのアパートに住む人たちは、大人も子供も大変苦労していた。

アパートの前にも小さな湧き水があったが、ほんの少ししか出ないので、それは当てに出来なかった。子供が小さなバケツを持って、少しずつ出てくる水を何時間も待って汲んでくるのだった。しかもその水は大きな道路のすぐ側にあるので、子供たちにはとつても危なかった。

12、トウモロコシ泥棒となる

1994年ころのある日。その日も私は朝早く目が覚めた。窓の外を見ると霧が真っ白に張っていて、よく見えない。朝鮮へ来てこんなに霧が深いのは初めてだった。今度引っ越してきた所は恵山ではとても高いところだ。あ、今日の天気も良いだろうなと思った。

そのときだった。隣の家主の声がした。

「光恵さんの母さん、起きた？」

「あ、起きたよ」

「じゃ、行こうか」

「どこへ」

「ま、ともかくリュックを準備しておいで」

私は稲のことを思い出しました。しかし、稲はもう済んだじゃないか、今度は何があるのかなと考えてみたが、思いつかなかった。

部屋のドアが開いて家主が入ってきた。

「ねえ、何があるの」

「黙ってついておいでよ」

「二人で行くの？」

「違うよ。大勢いるから心配しないで。さ、行くよ」

光恵が自分も行くと言い出した。兄も連れて行こうかと言うと、家主さんが

「もうすぐ来ると思うよ」と答えたので、どうして私の家族にこんなことを教えるのかと訊いた。

「このアパートに住んでいる人みんながやっていることだよ」家主はこう答えた。

「みんな知らん振りしているだけだよ。こうでもしないと食べていけないからね。」

それから私たちは一人一人別々に家を出た。道に出て行くと10人ほど集まっていた。私たちはみんな何も言わずに歩いていった。15分ぐらい歩いたのだろうか。道の両側にはトウモロコシがぎっしりと植えてあった。

それを見て私は気が付いた。そうか、トウモロコシがあったのかと思った。そのときまで霧は深く、5メートル前も判りにくかった。畑に入ってもどこに誰がいるのか全然判らない。家主が「早く中に入って、たくさん採るんだよ」と声を掛けてくれた。

胸がドキドキし始めた。でもここまで来た以上は、やめるわけには行かない。そのとき長男が言った。「母さん、早くしないとみんな帰ってしまうよ。」

私は気を取り戻して、手早くトウモロコシを持って折った。ぽきんと大きな音が響いた。ドキッとした。音が響く度にびくびくしていた。それでもトウモロコシ泥棒を続けた。

「ああ、もうこんなことをするのはいやだ。」「でも、こんな事でもしなければ食べていけない。」私は自分の中で板挟みになりながら、家族が生きていく手段を考えざるを得なかった。いやいや思いながらもリュックにぎっしりと詰め込んだ。そしてもう二度とこないと決心した。

霧はますます濃くなってきた。あっちの方でも、まだぽきんぽきんと音が聞こえてきた。静まり返った中で、ただトウモロコシを折る音だけが聞こえてきた。10人の中で、女の人は4人だった。男は大きな袋とリュックを持ってきたから、その畑のトウモロコシをたくさん取れただろう。

誰かが「みんな道に出ろ」といったので、私たちは道の方に向かって歩き出した。ざわざわとトウモロコシの間を抜ける音がした。私も一生懸命歩いた。だいぶ深く入ったのか、道がなかなか見えてこなかった。

13、赤ちゃんを死なせて埋めた母親

それから何か月か経った、たしか1994年のある日のことだった。隣の部屋から赤ちゃんの泣き声をした。私は隣に赤ちゃんはいないはずなのにと不思議に思った。そのとき私を呼ぶ声が聞こえてきた。

「おばちゃん、おばちゃん。」

「はい、どうしたの、何かあったの。」

答えながら隣の部屋に駆け込んだ。そのとたん、私はびっくりした。台所の隅に洗面器が置いてあり、その中を見ると赤ちゃんがうつ伏せになっているのだった。私は慌てて赤ちゃんに近寄り、抱き起そうとしたが、そのときはもう遅かった。

「何でこんなことをしたの。」

「生活が苦しいから、今赤ちゃんがいては何の商売も出来ないし、しかたないでしょう。」
と言いながら、産婦は泣いていた。

「それで、どうするつもり。」

「おばちゃん、どうしたらいいの。」

私にもどうすることもできない。だんだんと体が震えてきた。こんな時に誰か入ってきたらどうなるのか。何とかしなくてはならないと思った。

「お父さんはどこに行ったの。」

「仕事に行きました。」

「このことを知っているの。」

「いいえ、知らない。私ひとりでしたことなの。」

私はその場をすぐにでも離れたかったが、そうもできなかった。しかし、どうしたら良いのか見当も付かなかった。とにかく洗面器の中の赤ちゃんを何とかしなくてはならないと考えた私は、ぼろきれに赤ちゃんを包んで流しの隅に置き、洗面器の水を捨てた。

私は、よくもこんなことを仕出かしたものだと思った。

「お父さんが帰ってきても、何も言わないほうがいいんじゃない。」

でこぼこの台所の床の上では、そこで普通に生んでも、おそらく助からないだろうと私は思った。母親が赤ちゃんを片付けるのを見て、やっと家に戻ることができた。私はすぐにでも自分の部屋に戻りたかったが、知らん振りするわけにもいかないし、本当に困ってしまった。彼女は私を呼んだら、何かしてくれると考えたらしい。

夕方、その人の夫が帰ってきた。夜になって私の部屋にその夫が入ってきた。

「おばちゃん、どうしたらいいかな。」

「もう仕方ないから山に埋めるしかないでしょう。行くときね。お酒一本持って行って、埋める前にコスレ（厄払いするとき、食べ物を少しちぎって撒くこと）をして、また埋めた後もコスレをなさい。ごめんなさいと謝ってね。夜遅く行くのよ。誰かに見られないようにね。」と教えたものの、とても不安だった。朝鮮ではこんなことがたくあった。子供がたくいると食べていくことさえ本当に大変だから、こんな事も起きるのである。

14、娘のいる金策へ

1997年か1998年になると、家族はみんな離れ離れに暮らすようになった。一緒にいると食べるものを確保するのが大変だから、少しでも人数を減らし、それぞれ自分自身が頑張っ生きていくのだ。

長男は田舎へ行って自分の畑を作り、本当に一生懸命働きました。私は相変わらず、いろんなことをしながら、生活していった。

私は、ある日、次女と三女がいるところに行って見る事にしました。子供たちがどうやって暮らしているのか知りたかったのです。準備を整えた私は、汽車に乗りました。その中には、いろんな人たちが乗っていた。

そのとき私には切符がありませんでした。切符がない人はたくさんいる。表では切符を売ってくれないし、闇値段は余りにも高くて買えない。私は隅っこに小さくなって潜んでいた。目的地に着くまで捕まっはいけないと、汽車が駅に着く度にもう少しだ、もうちょっとだ、ぶるぶる震

えながら、体を出来るだけ小さくしてうずくまっていた。

三つの駅を過ぎたら目的地の金策だというところで、私は捕まってしまい、次の駅で降ろされる羽目になった。その日は、たくさんの人が捕まった。全部降ろされて改札口に向かう途中、誰かが一人隊列から抜け出して、汽車に乗った。捕まった人が多いと監視するのが難しい。私も力いっぱい走って汽車に乗った。大半の人が逃げたようだった。

捕まって降ろされたら、元の5倍ぐらいのお金を払って切符を買うか、集結所に行って自分の身を持って補償しなければならない。そうなることは知っていても、仕方なく運に任せるほかない。

15、金策に着く

こうしてやっと金策駅についた。今度はどうやって駅を出るのが心配だ。でもこの駅もたくさんのお客がおりた。私もその人たちのあとをついてでた。線路を渡りだした。私も一緒について走った。誰かが追いかけてくるようだった。

金策の娘の家には自分が作った風呂場もある。ここのアパートは会社の寮だ。ここにくるとお風呂に入る事にした。お風呂といってもお湯は無い。寒いときはお湯を沸かして、それで体を洗うだけだ。ここにくるとシラミもいなくなる。また家に帰るとシラミが増えてくる。毎日毎日よるになるとシラミ取りをする。頭にもたくのしらみの卵がある事もある。ちょっと時間があると子供たちにとって貰う。汽車に乗ったり駅などで待っていたりする時などは、皆かたまっているの、そういうところからシラミがうつる。どんなに自分で綺麗にしてもダメである。シラミは綺麗な人がいると、すぐにそこにうつっていく。道に座ってシラミ取りをする人もたくさんいる。

16、闇商売で生活を支える娘

今日も光恵はアカをもって汽車に乗った。今日も無事で帰ってこられるように、三女の体はだんだんと弱っていくけれども、朝早くおきて、今日売るパンを蒸す。電気コンロを使うから、私も朝早く、3時ごろでないと使えない。昼だと電気を調べに来る人がいるからだ。今日もやっと蒸し終わった。今日もたくさん売れるようにと祈るしかない。

今日は光恵が帰ってきた。今度は20日ぐらい帰ってこなかったの、捕まったのかなと思っていた。恵山で商売をしていたらしい。今度はタバコを売りに行く事になった。リュックサックに入れて二人は家を出た。もう市場にはたくさんの人が集まっていた。

タバコはあるおばさんに売ってしまった。もうけはだいぶんあった。光恵はまたそのお金でアカを買って恵山まで行くという。私はくれぐれも気をつけるようにおがんでいた。

17、アカを売りに行く

光恵も明日行くというから、私も一緒に行く事にした。夜10時10分の汽車なので、今から準備をしてもよいと思い、光恵の準備をしてやる。電線が今度は多かった。布で縫ったゲートルみたいなものを腰につけ、それから足にも巻いた。私も足に少し巻いた。体が少し重くなった思いだった。その上にズボンをはき上には上着を着た。なんにも分からないと思う。アカは皆で7キログラムぐらいになる。急いで駅の裏側に行く事にした。そこにも大分集まっていた。皆ただ乗りする人たちばかりだった。汽車が入ってくると、皆は汽車に向かって走り出した。私と二女と一緒に汽車に向かって走った。3分ほど止まっている間に汽車に乗らなくてはいけない。苦勞して乗り込んだ汽車の中はぎっしりだった。汽車の中の半分は恵山に行く人たちだ。みんな商売に行くのである。汽車は動き出した。やっと少し安心した。でもこれからだ。汽車の中には警察官が何人かいる。足に巻いているので座ることも出来ないし、本当に大変だ。本当にその気持ちはどうする事も出来なかった。これも生きるためにしなければいけないのだと思うと、しかたがなかった

何時間もたっていなければならなかった。ただ立っているのだったらいいのだけれど、それだけではない。いつなるとき警察官が来るかわからないのを待っているのは、本当につらい事だった。その時、横でこそこそと声が聞こえた。警察が来た、と私と光恵は顔を見合わせた。その瞬間、その場に座り込んだ。座ったら足が痛いことはわかっているが、警官が行き過ぎるまではどうにか我慢しようと思った。もう、すぐそばまで来ているのを人の間から私は見ていた。私と光恵のそばまで来た。その時「おばさんだいじょうぶ、おばさんだいじょうぶ」と光恵が声をかけた。私は、「大丈夫だよ、心配しないで」といった。そのとき警察の人も「おばさん大丈夫なのか」と聞き、私は「すみません、ちょっと汽車に酔ってしまって。大丈夫です。」「どこまで行くのか。」「はい、恵山まで行きます。」「まだ大分あるが、大丈夫か」と警察の人は親切に言ってくれた。「はい、大丈夫です。」「気をつけて」と離れていった。この時は、朝鮮の警察官でも優しい人もいるのだなと思った。私は安心して涙が出た。私のために、その周りの人を調べもしないで通り過ぎていった。みんなは胸をなでおろした。「おばさん、ありがとう。」とみんながお礼を言ってくれた。

こんどは改札口に出る時が大変だった。汽車はだんだんと恵山に近づいてきた。みんなも心配になるのか、ざわざわとして落ち着きがなかった。私はみんなの行くところについて行く事にした。汽車はプラットホームに着いた。キップが無い人たちはいっせいに裏口へと走っていった。私もその後を追うように走った。かなりたくさんの人なので、誰かを捕まえている間に他の人が逃げていくのだ。

私たちもうまく逃げられた。私と二女はやっと安心した。二女と一緒にアカを売りに行った。すぐには売れずに、いろいろ歩きまわった。「光恵、少し安くても売ってしまいな。ながい事もって歩いては危ないから売ってしまいな。」その日は売れずに、姉の家に行った。二女の子供たちも姉の家にいる。皆元気でいた。私も安心して家に帰ることにした。姉は婿の会社から靴の下請けをして生活している。時々光恵が生活費を持っていく。「明日はお母が帰るから、光恵、少しでも早

く売ってしまいなさい。危ないからね。」私は朝早く娘の家を出た。私の家まで帰るには、だいぶ遠い。山頂を登っていく間、どうやって食べていくのか私はわからなかった。ずいぶん上っていた。山頂の横にはいろいろな草が、たくさんいきいきと生えていた。私はどうすればこの草のように生きていけばよいのかわからなかった。これからはだんだん寒くなるし、本当にどうすればよいのか。私はこれから先1人で暮らす事に自信がなくなった。やっと家に着いた。私の下宿先の主人は家にいなかった。家の中に入ったら、かび臭いにおいがした。そのとき、玄関の開く音がした。「誰」と声を掛けると、「あ、おばさん帰っているの。遅かったわね。」と声を掛けてくれた。「どう？あっちのほうはお金儲けができる？」「そんな事は無いよ。どこも一緒だよ。」

明日は山に行って、また薪を集めてこようと思った。何にも無い部屋でもあったかいほうがいいと思ったからだ。そのうちに何かいいことがあると思う。私は山の中を駆け回るときが一番いい。何にも考えないで、まきを探すからだ。

家に帰ると、となりで水をバケツ1杯貰い、下着を洗った。着替えをする下着も無いから。ズボンと上着だけで、下着が乾くまではそれだけを着ていなければならなかった。

18、ふかしイモを売る

ジャガイモをふかして売る事にした。売れるかわからないが、誰もやってないので試してみようと思った。朝5時におきてジャガイモの皮を剥く。なかなか時間がかかる作業だ。今はジャガイモを安く買う事ができるから50個ぐらいふかした。紙とジャガイモをバケツに入れて、リュックサックに入れて持った。すでに9時ころになってしまっていた。30分ほど山を下りて市場に向かうと、市場にはもうたくの人が集まっていた。私は少し恥ずかしい気もしましたが、おもいきってバケツの蓋を開け、そこにすわった。バケツからは湯気がもうもうと上がってきた。その時、1人の女の人がそばによって来た。「コレいくらするの」と聞いた。「2個10円です」というと10円を渡してくれた。私は紙に包んで渡した。その場で女の方は包んだジャガイモを食べてみて、「美味しい、少し甘くて美味しい。もう10円下さい。」その女の方は暖かくて本当においしいよとみんなに言ってくれたので、2時間ぐらいですぐに売り切れた。また持ってきて売ることに決めた。また急な坂を上って急いで帰って行った。その日は少し寒いから、暖かいジャガイモなので売れたのかもしれない。

ジャガイモをふかして売るには、薪をたく使うことになる。1日2度売りに行き、早く売れたときは、山に薪を採りにいく。売りに行くより、薪集めをする方が大変だ。市場でも薪は売っているが、薪を買ってジャガイモを売っているのは、なんの儲けもないので、自分で山に行って薪をみつめなければならない。本当に貧乏暇無しというのはこの事を言うのだ。これからはしばらくすると雪が降り、山に雪が積もりだすと、薪集めもできなくなる。何をして食べていけばいいのかと考えると、本当に泣きたくなってくる私であった。

ともかく山に雪が積もるまでは一生懸命売りに行こうと私は思った。だんだん寒くなり、皆が寒そうに歩いている。ジャガイモを買って、帰りの山の坂道を登っていくのは、重くて本当に大変だ。いつまでこんなことが続くのか、食べて行くのってこんなに大変なのかと思う私であった。

19、靴を作って売る

子供たちは大丈夫なのかな、どうやって食べているのか、光恵は警察には捕まっていないか、私はいろいろ心配になった。誰からも聞くことができないので本当に心配だったので、一度行って見ることとした。少し貯まったお金で米を買い、魚も少し買い、それを持って行こうとした。朝鮮では、子供の家に行くにも、自分の食べ物は自分で持っていかなければならなかった。長くはいられなかった。私は長女弥生の家に行った。弥生たちはとても喜んでくれた。相変わらず弥生は靴の仕事をしていた。「どうだ。食べていくには少しは役立つのか。」と聞くと、光恵が少しずつ食べ物を持ってきてくれるし、魚なんかも持ってくるから。何とかなるよと弥生は言った。「お母さん、しばらくここにいて、私の仕事を手伝ってよ。」と弥生は言った。「でも家族が一人増えるのは大変だよ。」「だからお母さんと弥生の二人で何かをするのよ。」「何をする気なの。」「靴の仕事もするけれども、それにおかずを作って売ろうと思っているのよ。せんぎりは少し安く買って使うから大丈夫だと思うのよ。」「一度家で作って食べてからにしないとわからないよ。」弥生は早速せんぎりを買いに行くことにした。その間、私は靴の形を古着に写し取って、一生懸命に切り抜いていた。弥生たちに迷惑がかからないように、自分の食べることでだけでも自分で儲けようと思ったからだった。弥生はせんぎりを買って帰ってきた。せんぎりは洗って少し置いておく必要があった。

その間は二人でまた靴の仕事をした。

「やっぱり二人でするとたくさんできるよ。自分ひとりですると、なかなかはかどらないの。あれをやったりこれをやったりして少ししかできないのよ。」

「そう、それはよかったわね。私が出来る限り手伝うからね。」

弥生はとても喜んでくれた。弥生は結婚して10年にもなるのに子供がいなかったので、光恵の子供をとてかわいがっていた。光恵の長女、長男だった。その長男は弥生の子供として育てていた。小さい頃から弥生のそばで育てていたので、弥生をお母と呼んでいる。二人とも学校にいけなかった。でも子供は家で父が教えたり母が教えたりして、ほとんど読み書きは出来るようになっていた。これから寒くなるし、私はすることも無いので、喜んで弥生と一緒にいることにした。孫たちもとても喜んでいて。夜は電気が薄暗いので仕事ははかどらないが、一生懸命にがんばろうと思った。1998年の12月の半ばになって、弥生はこの靴を持って行って古着と換えてこようと言い出した。小さいのから大きいので50足ぐらい持って行って、正月に少しおいしいものでも食べようと言い出した。でもどこに行くのか。光恵のいる金策に行こうと言う。子供たちは婿と一緒にいればいいと言って、準備をし始めた。私たちがいない間の食べ物も買い集めた。孫はもう14

歳にもなっているから、自分で何でも出来るので、心配はなかった。

正月までには帰る予定で、私と弥生は金策へ行くことにした。大きなリュックサック 2 個にカバン 1 個の荷物になった。婿が帰ってくると、駅まで荷物を運んでくれた。駅にいる知人に頼んで切符を買ってもらった。汽車が入って来た。恵山は終点なので席は沢山空いていたが、汽車に乗ると、先に乗って席をいくつも確保する人がいる。席を沢山とって、その席を売る人がいるのだ。

婿が先に乗り込んで席を取ってくれた。やっとのことで大きな荷物を持って席まで行った。この時は汽車の切符があるから、落ち着いて座っていることが出来るので安心だった。しばらくすると汽車は動き始めた。汽車が止まるたびに沢山の人が乗ってくる。だんだんと場所が狭くなる。私は金策に行って靴が売れるか心配だった。6 時間で行けるところだが 8 時間かかって金策に着いた。着いたときは夜中だった。それから妹の家に行くにはあまりに遅いので、朝まで駅にすることにした。金策の駅にも沢山の人がいた。あまりにも荷物が大きいので大変だ。下手をしたら盗まれるから、私と弥生は交代で寝ることにしたが、私は眠れなかった。駅には今から汽車に乗っていく人もいれば、朝までここで過ごす人も沢山いた。私もうとうとしながら朝を待った。その時どこかで荷物を盗まれたという声があった。私もあわてて荷物があるか確かめて見た。弥生も起きた。そろそろ明るくなっていくころだったが、朝 7 時を過ぎないと明るくならなかった。だんだんと人が少なくなっていく。みんな目的地へと出かけて行くのだろう。

ともかく荷物を預けてオバの家に行くことにした。オバの家に行ったがあまり喜んでくれなかったのので、すぐに家を出た。また荷物を預けたところへ行ったら、荷物をすぐに探すことが出来なくて、少し待っていた。しばらくして、警察官が来て、この荷物は探すことが出来ないという。どうしてダメなのか聞いても、ともかくダメだと言う。「いつだったら探せるのですか。」というのと、「二日三日後にきてください」との事だった。私と弥生はまたオバの家に行くこともできないので、いろいろと考えたすえ、夕方になってまた荷物を預けたところへ行ってみた。

その時は警察官はいなかった。私はどうして荷物を返してくれないのか聞いてみた。するとその荷物は私たちが泥棒してきたものではないかと思っているようで、会社に聞いてみるといっているそうだった。調べればわかるから、私は少し安心した。靴と古着と交換するから、会社にとっても助かるのだ。しかし、荷物をいつになったら返してくれるか心配だった。正月前には家には帰らないと子供たちの食べ物が無くなってしまふからだ。とりあえず、金策駅から 1 時間かけて行かなければならない私の知り合いのおじいさんの家に行くことにした。

20、死体を埋めにきたトラック

金策は海が近かった。ともかく靴を探す間お願いしますとおじいさんの家にいることにした。朝は早くその家のおじいさんについて海に行った。海に着くと、波に流されている色々な海草が打ち上げられていた。ひじき、わかめ、いろいろな物が沢山あった。おじいさんはひじき、わかめだ

けを拾えと教えてくれた。私は一生懸命に集めた。その時だった、遠くのほうにトラックが1台来た。おじいさんはまた、「たくさんの人が死んだな」と独り言のようにつぶやいた。「おじいさん、あのトラックに死んだ人が乗っているの。」「そうだ。時々運んできては、この浜辺に埋めていくのだ」といって両手を合わせた。すぐにトラックは止まって2、3人、警察官かどうかわからないが降りて穴を掘り始めた。1時間ほど掘っただろうか。トラックから何かでくるんだ人を下していた。大人もいれば小さな子供もいた。本当にかわいそうだった。おじいさんはもう帰るぞと声をかけてくれた。私はすぐにおじいさんのそばに行った。拾ったひじき、わかめを持って家に帰り、ひじきはかまで蒸すのだ。それをおかずにして売るらしい。そんな日を10日ぐらい過ごしてから私と弥生はまたあの荷物を預けたところに行った。正月もあと5日しかないときだった。

「荷物は返す事になったが、金策駅では売らない様に。」と言われた。しかし、返してもらったら、どうにか売ることができるので私は喜んだ。私は店の主人に頼んで半分だけ、その日にもって行くことにした。私と弥生は少しずつ分けておじいさんの家にもって帰った。すぐに村の人たちにその靴を買ってくれないか聞いてみたが、初めのうちは買う人がいなかった。だんだんと靴1足15円または古着と交換だと分かってくれたが、正月までにとても売れそうになかった。おじいさんが明日違うところに行ってみたらと教えてくれた。私もその事は考えていた。

バスに乗って20分ぐらいのところに行った。その場所は大きな会社があるところなので人通りも多く、買う人もたくさんいた。一人一人古着を持ってきて買って行く人たちが出て来た。3日あとは正月だ。どうしても帰らなくてはならない。子供たちにどうしても米のご飯を食べさせなくてはと思い、一生懸命だった。

靴はまだ半分残っているようだった。会社の帰りに靴を見て、翌朝古着を持ってきてくれるように、遅くまで靴を広げておいた。その日持っていった靴は3個しか残っていなかった。古着とお金は450円ぐらいになっていた。またおじいさんの家になにか贈り物を買おうと思い、二人でその辺の店を探した。米を1Kgとトウモロコシを1Kgにおかずを少し買って帰った。おじいさんがとてもよくしてくれるので、私たちは本当に助かった。明日は靴を少し多く持っていこうという、弥生は「だめよ。たくさん売れても10個以上は無理よ。もう正月が近いから他のものを買う人が多いよ。」という。どうしても正月前には帰れそうにもなさそうだ。もし帰れなかったらどうしようと思い迷った。でも皆売らないと、持って帰ることは出来ない。結局年末には帰れなかった。

正月の二日だった。その晩は雪がちらほらと降ってきた。本当に正月気分だった。でも気持ち家はほうに行っていた。突然弥生の婿が金策までやってきた。私はまた何かあったのかと心配だった。婿の話によると、孫が何とかして正月を過ごしたようだった。婿は四日からは仕事に出なければいけないから、すぐに帰るといふ。私は弥生にお金と古着を持たせるようにとお願いした。古着もたくさん集まったし、二人では持って帰るのも大変だから、少しは持ってかえってと頼んだ。

婿が帰ってから三日後に私たちも帰ることになった。おじいさんにお礼を言って100円を渡した。おじいさんはそんなに要らないといていたが、私はお金を押し付けて家を出た。その代わりに汽車の切符を買ってくれた。そのおじいさんは、何年か前までは駅に勤めていたようで、駅員はおじいさんの言う事はすぐに聞き入れてくれるのだった。キップを買ってくれたお陰で汽車の中では何も心配なく、無事に家に帰ることができた。

21、ジャガイモを植える

朝鮮には「じゃがいもの種イモは命より大切」という諺がある。弥生の家に種にするジャガイモがあるとは私は夢にも思わなかった。ジャガイモの目をくり抜いて灰をつけておく作業に取り掛かった。じゃがいもは20Kgぐらいあった。弥生の家の畑は高いところにあった。孫たちも一緒に高い畑まで行ってじゃがいもを植えた。みんな植え終わるのには8日ぐらいかかった

22、光恵の逮捕

1998年のことだった。その日、警察官が尋ねてきた。「はい、私が母ですが。」「光恵の件で、明日刑務所まで来てもらいたい。」「何の罪ですか。」「密輸をしたからだ。」「いつ、つかまったのですか。」「もう1ヶ月になる。服や下着、靴や洗面道具などを用意してもらいたい。弁当もです。」私と弥生はすぐに買い物に行き、洗面道具、下着などを買い集めた。あまりに急なので、涙も出なかった。いつかこうなるのではないかと思っていた。夫正二がいた頃は、すぐ警察に言って頼めば助ける事ができたが、今は何にも出来る事がなかった。

朝早く恵山の刑務所に行った。恵山の人他他の刑務所に行くことになっていた。光恵はどこに連れて行かれるのかわからなかった。女ばかりいる刑務所らしい。光恵と一緒に捕まった女たちは4人いた。それぞれ違うところに行くそうだった。刑務所の中で私と弥生はしばらくの間待っていた。ドアが開いた。先に警官が入ってきた。次に光恵が手を縛られて入ってきた。それを見た瞬間涙があふれ出た。私は光恵を抱きしめた。光恵も泣き出した。光恵は「お母さん、ごめんなさい」と何度も謝った。そのたびに涙がこみ上げ、どうする事も出来なかった。「ご飯は食べた。おにぎりを持って来たから食べなさい」と言うと、光恵は警官を見た。私は警官に聞いた。「食べさせてください。お願いします。」警官は「汽車に乗っていくから、汽車の中で食べたらいじゃないか」といった。光恵はそのとき初めてどこかに連れて行かれるのだと分かったらしい。その事を聞きまた泣き出した。そのとき警察官が「今日の3時の汽車で行くから、そのときにお母たちは駅に来てください」といって、また光恵の手を縛って連れて行った。私と弥生は後ろ姿を見ながらまた涙が出て来た。私たちは外に出た。お金を少し持たせないといけないのに、お金は少ししかない。でもこれをもたせたら私たちは食べていけないのだ。どうしていいかわからなかった。弥生と相談した。弥生は「お母さん、自分たちはどうにかするから、光恵に全部お金をやりましょう」と言ってくれ

た。私はそれを聞き心配した。私もその言葉を言いたかったが、弥生の婿もいるし子供もいるから、その言葉をいえなかった。私はありがたかった。町を歩き回り、必要なものを買集めた。もう2時を回っていた。「弥生もう駅に行こうか。早く言って光恵に会わなきゃ。」「そうだね。お母さん、早く行こう。」

私と弥生は駅へと向かった。駅の時計は2時20分を過ぎていた。周りを見ても光恵たちは着いていなかった。それから20分ほどしてから現れて、手はまたヒモで縛ってあった。その中には男の人も2、3人いた。みんなで8人ぐらいた。警察官は5人ほどだった。光恵も私と姉を見つけた。駅のスピーカーでは汽車の案内をしていた。私は遠く離れてみていた。光恵は今でも走ってくるような格好だった。警察官が何か言っているみたいだった。そのことは光恵の耳にはいらぬみたいだった。警察官につれられてプラットホームに向かって歩いていく。光恵は警察官に注意を受けたみたいだった。私と弥生は駅の裏口を回ってホームに出た。光恵を探した。たくさんの人でなかなか見つからなかった。1番始めの列車の前に立っていた8人の中に家族が来ている人はいなかった。私たちは光恵に大きな荷物とお金を渡した。お金を渡すのを見られると、とられてしまうから、かくして渡した。私は警察官に会って出てくるまで何年かかるのか聞いてみると、3年だという。1年でも生きていられるかどうか分からないようなところに3年とは本当に長い。これからどんなに苦勞することかと私は光恵の身の上を案じた。そのときベルが鳴った。汽車は動き出した。たくさんの人を乗せた汽車は動き出した。たくさんの人たちはみんないろいろの悩みを持って汽車に乗り、少しでも生活が楽になるようにしようと遠くにまでいくのであった。汽車が動き出した。私も弥生も見ると涙があふれ出てきた。光恵も声も出さずに泣いている。「光恵、しっかり頑張って帰ってくるのよ。お母さん待っているからね。」「お母さん、子供たちをお願いします。姉ちゃん、スリヨンをお願いします。」「心配しないで頑張って帰ってきてね。」汽車はだんだんと早くなっていった。汽車の窓から体を乗り出して大きな声で叫んでいた。

体を乗り出しても手を振ることが出来なくて、声だけで叫んだ。だんだんと遠くなっていく汽車はどこまで行くのだろうか。汽車は行ってしまった。私と弥生はしばらくの間何にも言わずに駅の外に向かっていた。私はこれからどうしようかと考えていた。弥生も同じだっただろう。「さ・・・弥生、今日から頑張らなくちゃね。」「お母さん、私も頑張るから元気を出そうよ。」「さあ急ごう。ナミヨギが待っているよ。スリヨンはどうしたかな。無事に金策についたかな。」「お母さんの事がわかったらどんなに悲しむか。しばらくの間は言わない方がいいかも。」これからは山に食べられる草もたくさん生えてくるし、どうにかなるだろう。また山で薪集めをすることから始めなければならないので、今日は家でゆっくり休むことにする。私はなるべく光恵の事を考えないことにした。

六 ブローカーの誘いに乗って脱出へ

1、中国へ行く

それから1ヶ月ほど過ぎた頃だった。一人の女が訪ねて来た。「このごろ日本から手紙などが来るの」と突然聞いた。「いや何にも来ないよ。」「だったら電話番号は分かる?」と聞いた。「わかるよ。どこかにしまってあるはずだよ。」「中国に行って日本に電話してみたら。」「と言い出した。「しばらく考えさせてください。」「という、「そう、じゃあまた来るから考えておいて。悪いようにはしないから。電話をかけてお金でも送ってもらっては」といいながら女の人は帰って言った。

その日から中国に行って電話をかけることが頭から離れなかった。弥生は何にも言わなかった。私は中国にいったらみようかなと思う気持ちもあるし、反対に怖い気もする。まだ私はどうしていいかわからなかった。でも気になって、電話番号を書いた手紙を探した。見つかった。少しほっとした気持ちになった。中国に行って日本にいる母に電話し、お金でも送ってもらったら、少しは生活が楽になるかもしれないと思ったが、子供たちは「お母行きなさい」とは言わなかった。中国に行くのが並大抵ではない事ぐらいは皆わかっている。子供たちも行って欲しいのだが、口には出せないでいることぐらい私にはわかっていた。しかし不安で、私は決心がつかなかった。それから毎日毎日そのことばかりが気になって仕方がなかった。もし私が中国にいったら上手く行けば、子供たちも少しは楽になると思うと、行かないわけにはいかなかった。しかし途中で捕まってしまったら、反対に子供たちに迷惑をかけるかもしれないと思うと、それも出来ない。本当にどうしたらいいのやら、もし夫がいたらどうだろうかと思案した。それから何日かしてからまたあの女が来た。その日も私は山から帰ってきたところだった。「どう?決心した?」「でも中国に行くのは大丈夫なの?」と私は聞いた。「案内するから、大丈夫よ」とその女はいう。「たくさんお礼をしなければいけないのでしょうか?」という、「そんなことないわよ。ただ日本に電話をかけて上手く行けば、少し考えてくれればいいのよ。」と言った。

不安は大きかったが、家族が生き延びていくためには、どんなことでもするしかない状況にあった私は、中国に行く事にした。「行くわ。何か準備をするものはない?」「なんにもないよ。ただ電話番号だけを持っていけばいいのよ。あとは全部こっちです。中国からも人をつれて来る事になっているから安心して。」といていた。私は中国にいったらみようとだんだん気持ちが高まっていった。「私は行きます。」「じゃあすぐに行こう。」「私は電話番号が書かれた手紙を確かめて立ち上がった。「じゃあ行ってくるね。」といい、女の後についていった。

中国に出て連れて行かれた家から日本の母に電話することになった。

受話器から「もしもし、さいとう たついですけど」という忘れもしない母の声が私の耳に聞こえた。「お母さん」というと、とたんに涙がこみ上げてきて、何の言葉も出なかった。母のほうは状況が理解できず、「あなたは誰なの」と聞くので「お母さん、私は博子です。」と言うと「あなた博ちゃんなの。どこから電話をしているの。」と聞き返した。「ここは中国なの。お母さんにお願いがあって電話したの。聞いてください。お願いします。お母さん、お願いします。お金を少し

送ってください。お願いします。」

それからいろいろと話をした。そして最後にもう一度「お母さんお願いします。お金を送ってください。お願いします。」と繰り返したが、母は「あなた、朝鮮にいる人がどうして中国に来ているの。なんだか変よ。」と言って、「ともかくあなたは朝鮮に帰りなさい。そうして電話かけて頂戴。すぐに送ってやるから。」といて信用しない様子だった。「お母さん、私は中国に来て少しお金を借りています。そのお金をかえさないと朝鮮には返してくれないのです。」「どうしてお金を借りたの。」「ご飯代とか服を買ってくれたとかいろいろあるのよ。だからお願いします。送ってください。」「少し考えてからね。」といて電話を切ってしまった。

すぐにここにいる人たちは「どうだった。送ってやると言った?」と問いつめるので、「少し考えるとやったよ」と答えた。主はじゃあまた明日かけたらいいいじゃないかといい、部屋を出て行った。

私は明日になるのが怖かった。ダメだといったらどうしよう。今までの毎日、今日までで15日以上になる。食事代、自動車代などいろいろな費用をくれと言ったらどうしよう。本当に心配だった。ともかく母を納得させないと、私は家に帰ることさえできない。

明日になるのを待つことにした。久しぶりに話をしたのに、こんな話しか出来ないなんて本当に悲しかった。心の中で「お母さんごめんなさい。」とつぶやいた。いつになったら日本にいけるようになるのか。その日は時間がいつもより早かった。1日なにををしていたか分からないうちに過ぎていった。明日の事が心配で眠れない。どんな返事がくるのか気になった。「お母さんお願いします。」中国まで来てこんな頼みをすると思ひもしなかった。今日もいろいろとご馳走をしてくれた。食べながらもお金を送ってもらえなかったらどうしたらよいか、不安でいっぱいだった。この事をどうしたらいいのか相談する人もいないし本当に心細かった。「お母さん、私を助けてください。」と頼みだけだった。そんな事を思いながら眠りについた。夜中に何度か目が覚めた。やっぱり明日の事が心配で眠れなかった。

夜が明けた。母がどんな返事をしてくれるか、心配だった。この家の人たちも早く目が覚めたようだった。その家の主が市場に行ってみようという。私は市場を歩きながらも何にも見えなかった。電話が気になるばかりで、頭がぐるぐる回るだけだった。主たちはなにやらたくさん買い物をしているようだったが、私はうわの空だった。買い物が終わると、皆で家に帰った。朝ご飯を済ませてからしばらく皆でテレビを見ていた。10時ごろになって日本に電話してみようかと主が言ってきた。わたしはドキドキしてきた。しかし、電話をかけても母は電話にでなかった。また掛けなおしてみたが、だめだった。夜になってかけてみることにした。

夕食後、8時すぎになって、また日本に電話したが、この日はつながらなかった。母は家になかったようだ。なぜか私はほっとした。

日にちは過ぎてゆく。気はあせっていく。早く何とかしないと朝鮮では子供たちがどんなに

待っていることか。早く何とかしなくてはと思っても、電話がかからないのではどうすることも出来ない。どうか明日はお母さんが家にいるようにと祈るばかりだった。

私が家を離れて早くも20日ぐらい経過した。子供たちもどんなに心待ちに待っている事だろう。どうしても手ぶらでは帰れないし、母が何とかしてくれなければ、私は本当に朝鮮に帰れなくなるのではないかという心配もあった。「お母さん、おねがいします。」

「電話をかけようか」といいながら、私のところにこの家の主が来た。私は少し心配だった。ドキドキしながらダイヤルするのを見守った。そのとき、主が「出たよ」と言って、受話器を私に渡した。「もしもし。私、博子です。お母さんですか。」「違います。今お母さんと変わります。」と。しばらく何の声もなかった。そして「もしもし」と母の声がした。「おはようございます。私、博子です。」「あ・・・博ちゃんなの。どうしたの?」「お母さん。どう、お願いした事はどうかかな?」

「ね・・・博ちゃん。あなたは朝鮮に帰りなさい。帰ってから電話頂戴。そうしたら私がお金を送ってあげるから。」「でもお母さん。私が中国で借りたお金はどうするの。そのお金を返さないと子供のそばには帰れないの。だからお願いします。」「でもね、ここからお金を送ってやれば、あなたの手には残らないわよ。そんな事ぐらいわからないの。」と言った。その事を聞き、「あ・・・それが本当かもしれない。ではどうしたらいいの?」と私は母に聞いた。母は「とにかく朝鮮に帰りなさい。それが一番いい方法よ。」「だったら荷物だけでも送ってください。」「そうしたらね。明日のこの時間にもう一度電話をして頂戴。そうしたら準備をしておくから、そのときに場所を教えて頂戴ね。じゃあ明日待っているからね。博ちゃん本当に気をつけてね。さようなら。」

電話が終わると、また一緒に来た女の人と主たちが訊ねた。「お金はね、今は駄目だって。そのかわりに荷物を送ってやるから、送り先を明日のこの時間に知らせてくださいとのことです。」と伝えた。

はじめはこの人たちは嫌な顔をしていたが、すぐにそれでもいいじゃないかと言った。私は少し心配だった。母が私に朝鮮に帰ってから電話しなさいと言った事は言わなかった。またそのために私に付きまといわれる事が嫌だったからだ。とにかく明日を待つことになった。明日荷物を送ったとしても、早くても5日はかかるそうだ。荷物が来るまで、またどうして待っているかが心配だった。

翌日、また同じ時間に電話をした。電話がかかってくるのを待っていたみたいにすぐに出た。送り先の住所を教えた。母は「2個送るからね。その1コの中に男の背広が入れてある。その背広の内ポケットにお金10万を入れたから、その事は中国の人には言わないようにね。それから荷物が着いたらすぐに電話をしてくださいね。それじゃ博ちゃん、朝鮮に早く帰りなさいね。電話を待っているからね。」という、切れてしまった。主に荷物を2個送ると言っていたと伝えたが、お

金の事はいわなかった。

この時、私はふと思い出した。

「光恵が刑務所に行っであれこれ1年にもなるが、どうしているのか、つらい毎日だろうが、元気であるのだろうか?中国から帰ったら、一度光恵に会いに行ってみたいけれど、何かを持って行ってやる事が出来るのだろうか。何としても一度行ってみたい。」

「今まで光恵が苦労したのも、みんな私がしっかりしないからだ。そして、光恵が刑務所暮らしをしななければならないようにしてしまったのだ。もとはと言えば、私が朝鮮に来なければ。子供たちにこんな苦労をさせる事もなかったのに。」

荷物が着いたという知らせがあった。私が世話になっている家に娘がいた。その娘が郵便局に勤めていることを私は始めて知った。それまで1度もその娘を見たことが無かった。すぐに荷物を取りに行く事になった。私の他4人が荷物を取りについてきた。私はなにがなんだかわからなかった。ただ荷物をとりに行くだけなのに、どうして4人も人が行かなければならないのか、私は不思議に思った。行く時はタクシーに乗り10分ぐらいで着いた。とても大きな郵便局だった。荷物を受け取る場所に行った。名前をいうと、荷物を持ってきてくれた。ずいぶん大きな箱だった。1人でやっともてるぐらいの大きさだった。もう1個持ってくるのを何も言わずに待っていたが、主が中国語で何かを言っているようだった。郵便局の人は頭を振りながら人差し指を見せながら話をしていた。

私は荷物が1個しか来なかったのだと思った。私たち皆はすぐにそこを出て、車に乗り家に向かった。家に着いた途端に朝鮮から一緒に来た女の人は私に怒るように「弥生オンマ、嘘を言ったの」と大声をあげた。私はあわてて「嘘なんか言っていないよ。」と言った。私もどうしてなのかわからない。その時主は、「ではもう一度電話をかけてみればわかるじゃないか。」と言ってくれた。「そうだ。電話をかけてみればわかるじゃないの。」と私は言った。それでその場はおさまった。すぐに電話をかけることにした。すぐに母が出た。「お母さん荷物がついたけれども、どうして1個しかきてないの。」と言ったとたんに、お母さんのほうから「あのね、場所の字がね、1つ間違っって書いたみたいなの。それで日本にまた戻ってきたのよ。私も昨日わかったの。ゴメンネ。」「そうだったんだ。こちらの人はね、私が嘘を言っているのだと大変なの。」「博ちゃん、本当に朝鮮に早く帰ってね。子供たちが待っているからね。」「わかったわ。お母さん、私はすぐに帰るから。それでね、もしも中国から電話かかってくるかもしれないけれど、お母さんは私の声を聞いたらわかるでしょ。だから他の人からの電話は受け取らないでね。私はもう二度とこないと思うから、絶対に受け取っては駄目よ。わかったわね。」と私は念を押して電話を切った。とても寂しかった。すぐに女の人は聞いた。「2個送ったんだけど字を1字間違えたので、また日本に戻ったそうです。」「それだけなのに、何でそんなに長く話をしていたの。」と聞かれた。突然聞かれたので私はあわてた。「あ・・・また荷物を送ってあげるから心配しないでと言っただけよ。私が帰ってから

もここに送っていいって言ったのよ。」とっさに思いついたことだった。それを聞いた女の人や主は顔見合わせていた。私はほっとした。じゃあ荷物を開けてみるかと言い、女の方は箱を開け始めた。私が手をつける間も無しに皆で一生懸命だった。

私はビックリした。「お金を送ってこないから、お金の代わりに何でも貰っておけ」と言う事なのだろうが、あまりにも誰のものかわからない状態だった。私は何にもいえなかった。それぞれに選んで皆抱え込んでいた。でもみんな日本製品だから着てもいいし、売っても高く売れるそう。みんな新しいものばかりだった。みんながそれぞれ品物を取った後を見ると、箱の底に靴下が何足か残っているだけだった。私は少しさびしかったが、反対にこれで早く子供のそばに帰えることができると思うと嬉しかった。しかし、中国の人と女の方はすぐに返してくれそうになかった。また何かを考えているみたいだった。まだはっきりはわからなかったが、何かそんな様子が見えました。

その頃、朝鮮では選挙が迫っていた。私はそのことが気になって、早く帰らなければと思っていたが、毎日毎日雨が続き、川の水はだんだんと増えるばかりで、どうして帰るのかそれが心配だった。私は女の人に「早く帰らないと、選挙に行けなかったら大変な事になるのよ。あなたからもよく言って、早く帰れるようにして。」と言った。そのことを分かってくれたのか、私を連れてきた男の方は、それでは明日にでも帰ろう、と言った。私はほっとした。私は何にも持って帰るものは無いけれど、もう二度とこんな事はしないと。帰ることを思うと、あんまり長い時間なので、「来るときはどんな思いで来たのかといえば、お母さんに電話が出来る事だけが楽しみで出来たと思う。だから持って帰るものが何にもなくても、それでよい。」と思った。でもやはり、何もない、何の成果もない帰り道は、どんなに遠い事だろう。でも帰りのバスの中の検査はないそうだ。それだけでも一安心だと思った。雨もその日からは上がり、本当に天の助けだと思った。私はただ早く帰りたと思うだけだった。

2、2度目の脱出

2000年12月だっただろう、私が畑仕事をしていると知らない男の人が訪ねてきて、中国へ行って日本へ電話しようと言ってきた。前回の経験もあり、行かないと断ると、そのまま帰っていった。2001年1月にまたその男が来て同じことを言ったが、私は今度も断った。行こうとしても靴も服もないからいけないといった。その男は帰っていった。2001年2月にその男はまたやってきた。そしてまた、中国へ行って日本へ電話しようという。私は断ったが、子供たちの様子を見ると、行ってほしいという顔をしていた。日本に連絡をつけて、お金をもらってほしいという顔をしていた。男は服から靴までみんな持ってきていた。それでもう一度行ってみることにした。

2001年2月2日、私はその男と2人で4時間かけて列車の駅まで歩いていった。午後2

時ごろに出かけ、線路を歩き、アムノツカン沿いに歩いた。列車にのって恵山についたのは夜中の2時ころでした。朝8時ころ恵山から列車に乗り、国境の近くまで行った。

翌日の朝5時ころ川岸までいき、氷を確かめながらあるいて凍ったアムノツカンを渡った。川幅は10メートルほどで、すぐに中国側についた。川を渡ると林があり、その中に道ができていた。渡してくれた人は一人で帰っていった。林を出ると両側は畑であった。雪があり、人はいなかった。朝5時に出て、村に入ったのは午後2時ころだった。それまで山道を歩いてきた。山道を降りると道路があったが、その道は危険なので、また山道に入って歩いた。山を降りるとバスが来る道にでたので、バスに乗った。7、8時間もバスに乗っただろう。延吉まで行った。検問もなく到着した。そこで、2、3日してから日本へ電話した。電話はまったく通じなかった。このため、つれてきた人はがっかりしたと思う。北朝鮮へ帰ることにしたが、日本人を知っているので、会ってみたいかという。日本に行くことができるかも知れない。その日本人のおじさんに会うことにした。タクシーに乗ってそのおじさんに会いにいった。その人から「日本の国籍はあるか」と聞かれ、「ある」と答えると、それを確かめるといってくれた。5月ころ、私の戸籍のコピーを送ってきてくれた。

日本国籍があったので、日本政府の保護を受けることができ、8月2日、私は日本に戻ることができた。